

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ昔話集』（一八五七）試訳（その一）

鈴木満訳・注・解題

まえがき⁽¹⁾

中部テューリンゲンミッテルのアルンシュタットアルンシュタットその他で薬剤師主任助手、後にザクセン＝マイニンゲン公国の首邑マイニンゲンマイニンゲンで公爵家の司書ヒッリオチカールとなったルートヴィヒ・ベヒシュタイン Ludwig Bechstein（一八〇一—一六〇）は、十九世紀後半のドイツ語圏において、彼自身が尊敬していたグリム兄弟すら凌ぎ、極めて精力的かつ極めて人気のあった口承文芸編著者だった。

彼はフランス人亡命者ルイ・ユベール・デュポントローデュポントローの非嫡出子として、一八〇一年十一月二十四日ザクセン＝ヴァイマル公国の首邑ヴァイマルに生まれた。母ヨハンナ・ドロテア・ベヒシュタインは当時二十六歳、アルテンブルクの官吏ヨーハン・ヴィルヘルム・ベヒシュタインベヒシュタインの娘だった。フランスのヴァンデ地方ヴァンデのフォントネイフォントネイ・コント出身である父は、絶えず旅行していて、定住地は不明、と記録されているのみ。

父の名と姓を継いだルイ・デュポントローは誕生後すぐ、母親によって報酬目当ての人間の許へ里子に出され、

一八一〇年まで不幸で悲しい子ども時代を送る。この年十月、マイニンゲン近郊のドライスイヒアカー在住で、母方の伯父に当たる、植物学と鳥類学の分野で今日でもその名は忘れられていないヨーハン・マテールウス・ベヒシュタイ⁽¹¹⁾ン夫妻が子どもを引き取り、年末には姓をも与えた（夫妻は一人息子に早世されたのである）。ルイ・ベヒシュタインは翌一八一一年以降ルートヴィヒ・ベヒシュタインと名乗る。ルートヴィヒ・ベヒシュタインが自然に、そしてとりわけテューリング^{ヴァルト}森のうららかな山並に、深い愛着を持ったのは、疑いも無くこの伯父夫妻の薫陶を受けたためであろう。彼は伯父⁽¹²⁾養父のために記念碑を建立したし、一八五五年には『ヨーハン・マテールウス・ベヒシュタイン博士とドライスイヒアカー林学講習所』なる著書を刊行している。

さて、伯父夫妻の庇護下に置かれたお蔭でこの子はマイニンゲン古典語^{リュッ}高等^{エウ}中学^ムに入学することもできた。余暇に彼は多量の読書に耽り、奉公人部屋で故郷テューリング^{ヴァルト}の伝説を物語るのを好んだ。結局彼の勉学熱は空想力ほど強くはなく、大学入学資格試験^ア（^レ古典語^リ高等^ユ中学^ウ・^キ古典語^ム中^ナ高^ジ等^ウ学校^ム卒業資格試験）の前に学校を退き、一八一八年アルンシュタットの薬剤師の徒弟^レとなつた。その後アルンシュタット、マイニンゲン、バート・ザルツンゲン⁽¹³⁾で薬剤師主任助手として仕事、傍ら著述を続けた。こうして十年が過ぎたが、その後の人生は決定的に変わった。彼の君侯ザクセン⁽¹⁴⁾マイニンゲン公ベルンハルト・エーリヒ・フロイント⁽¹⁵⁾が、一八二八年に出版されたベヒシュタインの『十四行詩の環』^ソ *Sonettensrinze* ^テ ⁽¹⁶⁾を読んでこの若き抒情詩人に着目したためである。

公爵の後援で、ベヒシュタインは一八二九年と一八三〇年、ライプツィヒ大学とミュンヘン大学で哲学、史学、文学を学んだ。既に述べたように大学入学資格試験は受けずじまいだったが、学籍登録^イ ^マ ^ト ^リ ^ク ^ラ ^ツ ^ィ ^ヒ ^ウ ^ニ ^ン ^ゲ ^ン ^の ^民 ^話』⁽¹⁷⁾ *Thüringische Volksmärchen* と題する創作集を発表したほどの才子だから、それも当然かも知れない。

短期の大学生活ではあったが、お蔭で彼の心に「古代」への著しい傾倒が目覚めた。一八三一年故郷へ戻り、公爵によって司書に任命された彼は、一八三二年「ヘンネベルク古代研究協会」を創立、死の三年前までその初代協会長の座にあった。一八三二年には二十四歳のカロリーネ・ヴィスケマン⁽¹⁷⁾と結婚もした。彼女は一子ラインホルトを産んだが、早くも一八三四年に死ぬ。一八三五年ベヒシュタインはテレゼ・シルツ⁽¹⁸⁾と再婚。彼女は七人の子を彼に贈った。

当時の司書というものがそうだったように、ベヒシュタインも自由な生涯を送った。彼は資料を収集し、著述を行い、詩文を創作し、幾つもの大旅行を敢行、パリへも赴いた。しかしフランスは彼の性に合わなかった。アルザスのヴォージュ山地（ドイツ風に申さば、エルザスのヴォーゲゼン山地）まで戻って来て、やつとのんびりしたようだ。一八五六年ザクセン＝マイニンゲン公国太子ゲオルクとイタリアへも旅行しているが、結局のところ、彼を魅惑したのは三つの地方のみ。すなわち、テューリンゲン、フランケン、そしてポヘミアである。これらの地方はとりわけ彼の口承文芸収集の情熱に報いてくれた。

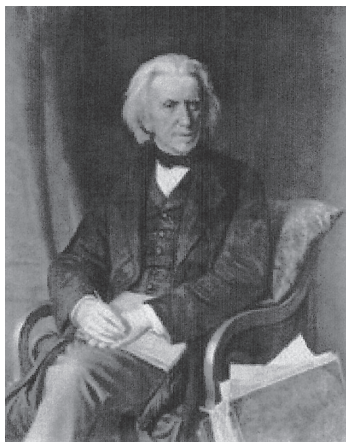
『テューリンゲン地方の伝説群と伝説圏』*Der Sagenschatz und die Sagenreise der Thüringerlandes*（一八三五—三八）、『オーストリア帝国の民間伝説、昔話、宗教伝説』*Die Volksgen, Märchen und Legenden des Kaiserstaats Österreich*（一八四〇。奇妙なことだが、題目に明記されているにも関わらず昔話は収録されていない）、『フランケン地方の伝説群』*Der Sagenschatz des Frankenlandes*（一八四二）、『ドイツ伝説集』*Deutsches Sagenbuch*（一八五三）、『テューリンゲン伝説集』*Thüringer Sagenbuch*（一八五七）が続続出版された。これをもってなお足りとせず、彼は歴史資料や伝説を素材として民謡調物語詩や譚詩も少なからず生み出した。既に一八二九年『リブツサの予言』*Die Weissagung der Libussa* を刊行してゐるし、更に『ハイモンの子とみたち』*Die Heimmans-Kinder*（一八三〇）、

ホルバインの絵に刺激されて『死の舞踏』^{トイテンタン} *Der Totentanz* (一八三二)、『ファウストゥス』*Faustus* (一八三三)、『ルター』*Luther* (一八三四)、『そして死後の一八六五年』テューリッングンの王家。その災禍と没落』*Thüringens Königsbaus. Sein Fluch und Fall* が上梓された。

これに加うるに歴史小説、紀行もあるが、これらは一応措くことにする。

しかし、グリム兄弟の『子どもと家庭のための昔話集』*Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm* (KHM) を幼いころ愛読した訳者にとつて最も関心があるのは、他でもない、グリム以降、グリム兄弟に類似した昔話収集上の業績を、それもKHMとはば同様の分量で残した彼の昔話集である。すなわち、『ドイツ昔話集』*Deutsches Märchenbuch* (一八四五)、『新ドイツ昔話集』*Neues Deutsches Märchenbuch* (一八五六)、『そしてもう一つ』*ドイツ昔話集』Deutsches Märchenbuch* (一八五七)、『更に既にちらと言及した』*テューリッングンの民話*』(一八二三)の四集。

最後のもの、すなわちベヒシュタインの初期の愛らしい習作は、ロマン主義的色彩の濃厚な美しい文体の四つの物語から成る。すなわち、『ゼリンデ』*Selinde*、『ハラルト・フォン・アイヒェン』——十二世紀後半の「劇」^{コト} *Harald von Eichen. Eine Skizze aus der 2ten Hälfte des 12ten Jahrhunderts.*、『ペーラーの洞窟』——民話^{フォルクスマーレン} *Die Böhlersöhle. Volksmärchen*、『巨人の匙』——ある昔話^{メルトン} *Der Riesenlöfel. Ein Märchen* である。これらはテリム兄弟の行き方とは異なり、郷土テューリッングンの大先輩であるザクセン・ヴァイマル公国の文人ヨージョハン・カール・アウグスト・ムゼーウス(一七三五—一八七)著『ドイツ人の民話』(五分冊。一七八二—一八六) *Johann Karl August Musäus: Volksmärchen der Deutschen* と同じく素材を民間伝承に借りた、あるいは借りたように見せ掛けている創作昔話^{メルトン} である。従つて口承文芸論的研究の資料とはなしえない。



晩年のルートヴィヒ・リヒター

けれども、その物語作法にムゼーウスの影響が甚だ顕著であり、「ゼリンデ」に至ってはムゼーウスの長編「メレクザーラ」の登場人物を借りて来て楽しんでいるので、『ドイツ人の民話』の訳・注・解題を全三卷（『リユーベツァールの物語』『沈黙の恋』『メレクザーラ』。いずれも国書刊行会）として本邦で始めて刊行しえた訳者は、こりゃあ、ぼくでなくっちゃ訳せない（事実、そうだ、と思いますよ）、と「ゼリンデ」紹介を思い立ち、訳・注・解題を「人文学会雑誌」第三九卷第三号（二〇〇八・一月）に掲載、更にまた（騎虎の勢い已むに已まれます）、「ハラルト・フォン・アイヒェン」の訳・注・解題を同誌第三九卷第四号（二〇〇八・三月）に、「ペーラーの洞窟」の訳・注・解題を同誌第四〇卷第一号（二〇〇八・七月）に、「巨人の匙」の訳・注・解題を同誌第四〇卷第二号（二〇〇八・十一月）に掲載した。

さて、一八五七年版の『ドイツ昔話集』である。これには同時代人で著名なロマン派の画家ルートヴィヒ・リヒター⁽²⁾の挿絵が豊富に鏤められている。

収録された昔話にはKHM第七版（いわゆる決定版。やはり一八五七刊行）のそれと重複するものも少なくないが、日本では知られていないたぐいの方がずっと多い。また、ベヒシュタインの編集は、民間伝承の本質を十分に理解しながらも、口承文芸研究者というよりもむしろ文人の立場から行われているので、昔話本来の素朴さを失わないまま、物語として首尾一貫し、KHMにはややもすれば看取される筋の欠落、不自然、尻切れとんぼといった（あくまでも文芸学的に見た上での不条理な難詰ではあるが）瑕疵はまず存在しない。

比較口承文芸研究・民俗学の泰斗ルツ・レーリヒ教授⁽²⁾(敬愛するレーリヒ先生は二〇〇六年十二月二十九日に物故された)は次のように述べている。

世紀転換期頃(十九世紀末から二十世紀初頭)まで(のドイツ語圏では)、ベヒシュタインの幾つもの『昔話集』^{メルヘン}はグリムのKHMより更に人気を博し、更に広範に普及していた。こうした多大な成果にリヒターの挿絵の数が大いに貢献したことは確かである。⁽²³⁾

しかしながら管見の及ぶ限りでは今のところ『ドイツ昔話集』(一八五七)の邦訳はない。

そこでできるだけ十九世紀半ばのドイツ語原文の雰囲気伝える日本語(従ってこれは古風なものならざるをえなかった)を心がけ、物語の背景を成す中・近世ドイツ語圏の文化的・社会的状況理解の一助となるよう詳細な訳注を附し、簡単な解題(本来は「解題略記号凡例」にあるように、多くの参考文献を記すはずだったが、紙数を考慮して最低限度に留める。ただし、いずれ充足するつもりなので、凡例はこのままにしておく)を添え、更にL・リヒターの挿絵も紙面の許す限り掲載し、今後何回かに分けて発表する。ただし、KHMとほぼ筋が一致するものは原則として番号とタイトルだけを掲げるに留める(「ベヒシュタイン一流のおもしろさが顕著な場合は訳出」)。

目下のところ底本としてはヴァルター・シエルフの注とあとがき付きで、ルートヴィヒ・リヒターの一八七葉の挿絵が入った下記を用いる。⁽²⁴⁾ Ludwig Bechstein: *Sämtliche Märchen. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt* 1972.

なお、訳文中の「」、「その他の」の部分⁽²⁵⁾は訳者の説明・補足である。

一八六〇年五月十四日ベヒシュタイン逝去。享年五十九歳。墓はマイニンゲンの公園墓地にある。



ルートヴィヒ・ベヒシュタイン。
陶板に描かれた油彩。

訳注・解題略記号凡例

- A T アンティ・アールネ／ステニス・トンプソン編著『民話の語型』 Antti Aarne / Stith Thompson: *The Types of the Folktale*. Suomalainen Tiedakatemia. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 1964.
- A T U ハンスヨリエルク・ウター著『国際的民話の語型』 Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography*. 3 Vols. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 2004. A T の増補改訂版。
- B P ヨハンネス・ホルテ／ゲオルク・ホリーフカ編著『KHM注釈』 Herausgegeben von Johannes Bolte / Georg Polivka: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. 5 Bde. Georg Olms Verlagsbuchhandlung. Hildesheim 1963.
- D M B (一八四五) ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Deutsches Märchenbuch* (1845).
- D M B (一八五七) ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Deutsches Märchenbuch* (1857).
- D S グリム兄弟編著『ドイツ伝説集』 Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*. 第一卷（一八一六）。第二卷（一八一八）。
- E M クルト・ランケ創始／ロルフ・ヴィルヘルム・ブレデーニヒ編『昔話百科事典』 Begründet von Kurt Ranke. Herausgegeben von Rolf

Wilhelm Brecht zusammen mit Hermann Bausinger: *Enzyklopädie des Märchens : Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Walter de Gruyter. Berlin [u.a.] 1977.

HDA ハンズ・ズビートル・シムトロイプリ編『ドイツ俗信事典』 Herausgegeben von Hanns Bächtold-Sträubli: *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*. 10 Bde. Walter de Gruyter. Berlin / New York 1987.

HdM 『ドイツ昔話便覧』 *Handbuch des deutschen Märchens*. 1のなかの2巻のみが一九四〇年までに刊行された。EMの前身。

KHM グリム兄弟編著『子どもと家庭のための昔話集』 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. 初版第一部 (一八二二)・第二部 (一八二五)。決定(第七)版 (一八五七)。

NDMB (一八五六) ルートヴィヒ・ズビシュタイン編著『新ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Neues deutsches Märchenbuch* (1856)。

VdD ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著『ドイツ人の民話』 (一七八二-一八六) Johann Karl August Musäus: *Volksmärchen der Deutschen*. 5 Teile.



一 勇敢な小男の仕立屋の話

昔むかし小男の仕立屋⁽²⁶⁾がいた。住んでた町の名はローマ⁽²⁶⁾ディア。これがある時仕事をしながら傍に林檎⁽²⁶⁾を一つ置いといたところ、まあ、夏なんて季節はそんなものだけど、林檎の甘い香に惹かれてたくさん蠅⁽²⁶⁾がたかった。そこでかっとした小男の仕立屋は丁度布地⁽²⁶⁾入れへ落⁽²⁶⁾とそうとした端⁽²⁶⁾切れを押⁽²⁶⁾取り、林檎をびしゃりとやらかしてからひよいと見ると、蠅⁽²⁶⁾が七匹叩き潰⁽²⁶⁾されていた。いやあ、あたしゃあ大した勇士だねえ、と小男の仕立屋は考えた。で、すぐさまびかびかの鎧⁽²⁶⁾を誂⁽²⁶⁾えると、胸⁽²⁶⁾当ての上に黄金⁽²⁶⁾文字で「一打ちで七つ」と書⁽²⁶⁾かせたもの。それから小男の仕立屋はこの鎧⁽²⁶⁾を一着に及び、路地や大通りを歩き回った。胸⁽²⁶⁾当てを目にした人人は、この豪傑、たった一打ちで七人の男を殲⁽²⁶⁾したんだ、と思⁽²⁶⁾い込み、恐れ⁽²⁶⁾おのした。さてこの同じ国に王⁽²⁶⁾がいて、その名声は天下にあまねく轟⁽²⁶⁾いていた。偉業⁽²⁶⁾を成し遂げるなり、怠⁽²⁶⁾け者の仕立屋さん、すぐさま針と鋏⁽²⁶⁾と火熨斗⁽²⁶⁾を掛け釘⁽²⁶⁾にぶら下げてしまい、さて赴⁽²⁶⁾いたのがこの王⁽²⁶⁾の許。王城⁽²⁶⁾の中庭に入り込むと、その草の中にひっくり返⁽²⁶⁾って、ぐっすり寝⁽²⁶⁾入ったもの。出入りする召使⁽²⁶⁾たちは豪勢な鎧⁽²⁶⁾に身を固めている仕立屋の

姿を眺め、例の黄金文字を読んで、当代のような平和な御世みよにこんな闘い好きが王宮で何をやらかそうというのだらう、と大いに訝いぶかしんだ。大物だつてことはこれっぽっちも疑うたがいない、と思われた。

王の顧問官たちはこれまた同様、眠っている仕立屋を見て、この由をいとも優渥ゆうあくなる国王陛下にご注進申し上げ、一朝合戦いちちやうかっせんといつた紛糾ふんきうが生じますれば、かような勇士は大いに有用な存在となり、国家に貢献いたすことができましょう、との見解を鞠躬きつぷうしよ如として捧呈した。王はこの意見が大層御意ぎょいに召し、即刻鎧姿の仕立屋のところへ使者を遣わし、仕官を望むか、と訊かせた。仕立屋の返辞。自分がこちらへ参上したのはまさにそのため。国王陛下が忝くも自分を必要とお考えあそばすなら、奉公いたせ、とのご仁慈を垂れたもうようお願いつかまつる、と。王は小男の仕立屋が家臣となることを聞き入れ、彼に立派な宿舎・居室しよを与えるように命じ、何もしないのに、おもしろおかしくすてきな生活が送れる結構なお給金を下しおかれた。

けちな俸禄しかもらっていない王の騎士たちが、罪のない仕立て屋さんを恨み、悪魔のところに行つちまいやがればいい、と思うようになるまで大して時間は掛からなかつた。ことに、彼と揉め事を起こしたら、ろくすっぽ太刀打ちできまい、と心配だつたし。なにせ、そんなことになつたら、相手はいつでも自分たちをたつた一打ちで七人叩き殺すだろうからね。さもなければさつさと追い出してしまいたかつたのだが。そこで騎士輩きしばいはどうすればあの背筋がぞくぞくつとするような戦人いくとじんを始末できようか、と二六時中思案を廻らした。しかし面面の頓智頓才とんちとんさいは着ている短上着たかぎ同様(20)いくらか寸足らずに裁たれていたので、勇士殿を宮廷から遠退とんたいける計略は見つからなかつた。そこでどどのつまり衆議一決、打ち揃つて王の御前にまかり出で、長のおいとまを頂戴したい、と申し上げよう、ということになり、これを実行した。

善良な王は、忠義な臣下たちがたつた一人の男のせいで自分を見限ろうとしているのを知り、いまだかつて味わつ

たことのない悲しみに沈み、あんな勇士なんぞに会わなければよかった、と考えた。さはさりながら解雇するのも躊躇された。あの男のために全臣民もろともやつつけられ、そのあと自分の王国があつた暴れ武者に乗つ取られるんじゃないか、と心配だったから。そこで、何もかもうまく片付け、上上の首尾に漕ぎつけるにはどうすればよいか、この難問の解決を模索、とうとうある企みを考え出し、これを使えば、あの戦人（だれも仕立屋だとは思っていないかった）を厄介払いしてしまえるだろう、と思ひ込んだ。即座に勇士を召し出して、こう語つたしだい。余（王）は、貴公（仕立屋）ほど勇猛果敢な武士は決してこの世にはおらん、と思う。さて、近くの森に巨人が二人棲みついていて、余の領内で略奪、殺人、放火といったげにも由由しき凶行を働いて廻り、武器その他いかなる手段を用いても打ち勝つことができぬ。というのは巨人どもを殺そうと余がどう画策しても、やつらは全てぶち壊してしまうからだ。やつらを本当に退治してくれば、余は姫を妻として与え、王国の半ばをその婚資として提供するのである。また、巨人征伐のため騎士を百人助勢として添えるつもりである、と。

こう王に告げられた小男の仕立屋はすっかり好い気分になり、王様のお婿さんになって、王国の半分を持参金として戴くのは、悪くないな、と考えた。そこで勢い込んでいわく。いともお恵み深き国王陛下に喜んでお仕え申し上げ、巨人どもを始末してご覧にいれまする、百人の騎士の加勢などなくてもがな、やつらを殺すすべは心得ております、と。それからその森とやらへ出掛けて行き、要らない、と言つたのに王に命じられて致し方なく随つて来た百人の騎士には森の外で待機しているように命じ、自分は茂みに入った。そしてどこかに巨人がいまいかと偵察して回つた。長いこと搜索してから漸く連中が一本の樹の下で眠っているのを発見。しかも彼らの軒ときたら、あたりの木木の太枝が、嵐に見舞われているように、ゆらゆらと撓うありさまだつた。

仕立屋はさして考えもせずに、急いで懐に小石をぎつしり詰め込み、巨人たちが根元に眠っている樹に攀じ登り、

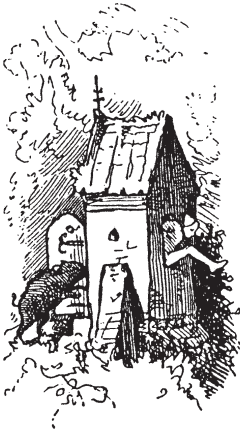
片っぱの胸板目掛けて堅い石ころを投げ始めた。その巨人はすぐさま目を覚まし、相棒に腹を立て、なんだっておいちをひっぱたくんだ、と詰なった。もう片っぱの巨人は精一杯詫言を入れ、知らずにぶちまったんだよ、眠ってやらかしたに違いない、と言った。で、また彼らが寝入ると、仕立屋はまた石を手に取り、違う巨人に投げつけた。こちらは飛び起きて仲間へ腹を立て、なんだっておいちに石を投げるのか、と詰問した。言われた方は、何も知らん、と言いつ張った。二人の巨人が少しばかり口喧嘩して、眠たいので再び目を閉じると、仕立屋はまたしても烈しく先ほどの石をぶつけたから、こちらはもう辛抱できず、殴りおつたな、と思ひ込んで相棒を手ひどくぶつ挫くいた。さて、やられた方は堪忍袋の緒がぶつ切り切れたものだから、双方ぱつと立ち上がり、そこいらへんの木目を地面から引っこ抜き——なんとも幸いなことに仕立屋が座り込んでいた樹は無事だった——、それでもつめてつめたやたらに叩き合い、最後には両方とも殴り殺されてしまった。

座り込んでいた樹から、二人の巨人がお互いを殴り殺したのを見届けた仕立屋は、天にも昇るような気分、いそいそと樹から降りると、巨人めいめいに剣で切りつけ、一箇所か数箇所傷を負わせると、森を出て、騎士たちのところに行った。こちらは、巨人を発見したか、それともどこにも見当たらないか、と訊ねたもの。「ああ」と仕立屋。「いた、いた、見つけた。それで二人ともぶち殺した——あたしがね。連中はどこかの樹の下に転がってる」。これを聞いた騎士の面、不思議がるもいいところ、男が独りつきりで怪我もせずにあの巨人どもを退治した、それも事もあろうに殴り殺ししまった、なんて話は信じられなかったし、信じたくもなかった。そこでこの奇蹟をとっくり検分しようとする自分たちも馬で森に入り、かくして仕立屋の英雄が告げた通りのものを発見した。騎士たちはなんともまあびつくり仰天、ぞくぞくする恐怖を覚え、これまでも増していやあな気分になった。この勝利者を敵に廻したら一同悉く殺されてしまうだろう、と思ったので。こういふしだい彼らは都へ戻り、王に事の顛末を報告したのだった。



さんはこれも承諾、綱を一巻き持つと、兇暴な一角獣が棲んでいる森に出掛け、付添いの者たちに、森の外で待つように、と言いつけた。いわく、自分は独りで中に入り、独りで事をやり遂げたい、例の二人の巨人たちを退治する事も他人の助けを借りないで独りで済ませたように、と。暫く森の中をぶらぶらしていた仕立屋は一角獣に気がついた。角を突き出し、こちら目掛けて突進、殺そうとする。仕立て屋は身動きせず、すぐ近くに迫るまでじっと待ち受け、間近になったとたん、最寄りの樹の後ろにさっと身をかわした。疾走していてもう向きを変えることができな

さてそれから仕立屋が王の許に参上、成し遂げた仕事を直接ご披露申し上げ、王女様を王国半分を添えて頂戴つかまつりたい、と言いつくと、王はこの素性も知れない戦人にした約束をひどく後悔した。何せ、巨人は片づけられてもう何も悪いことなんぞできなくなっているし。どうすればまともな遣り方でこの勇士と縁切りできるか、とつくり思案した。息女をくれてやるなんてこれっぽっちも考えたことは無かったのである。そこで仕立屋に向かってこうのたもうた。また別の森なのだが、そこには残念ながら一角獣ユニコルが一頭のさばっている。これが余の魚イサやら臣民やらに大層害を与えている。こいつもどうか捕まえて欲しい。それが成就すれば、姫を嫁に遣わつかそう、と。お人好しの仕立屋



った一角獣は泡を喰ってその樹にまっしぐらに進んだので、鋭い角をほとんど貫通せんばかりに突っ込んだ。で、角は刺さったままびくとも動かなくなった。仕立屋は一角獣が樹にくっついてもがいているのを見て取ると、樹の後ろから前へ出て、かねて用意の綱を一角獣の頸に絡ませ、完全に樹に縛りつけた。それから森の外に控えている狩猟の同勢のところに行き、兇暴な一角獣に勝ったことを教えた。それから小男の仕立屋は王の御前に伺候、ご用命を無事に果たしましてございます、と恭しく言上、王の二回に亘る約束を慎ましやかに思い出させた。そこで王は殊の外意氣銷沈、どうしたらよいものか、と途方に暮れた。仕立屋は息女を欲しがり、自分はやりたくないぞなかつたんでね。そこでもう一つこの戦人に要請した。つまり、三つ目の森に出没して何もかも荒し回る物凄い猪を擒とらにしてみらいたい。それが成就したら、遅滞無く姫を嫁に遣わそう、またこのたびも配下の猟師たちを全部加勢に付けよう、と。

仕立屋は、王の度重なる要請が特に嬉しかったわけではないが、同勢と一緒に森へ出向き、森林に到着すると、外に留まっているよう指図した。猟師たちはいやもう心から喜んで満足した。なにしろ猪のやつはこれまでしばしば、彼らの多くが帰宅するのを永遠に忘れてしまうようなもてなしぶりを発揮したからで。そこでもうこの猪を追っ掛け回すなんてまっぴらごめんだったわけ。されば一同、仕立屋がたった一人で危地に足を踏み入れ、自分たちを安全圏に残して行くのを真底ありがたがった。仕立屋が森に入ってさほど経たないうちに、猪は気がついて、口に泡を吹き、牙を研ぎ澄まして襲い掛かり、ただちに地面に叩きつけようとした。そこでこちらは震え上がり、急いで逃げよう、と辺りを見回した。運良く壊れた古い礼拝堂——以前人人がそこで贖宥しよくゆうを授かった——がその森にあるのが目に留まり、またその近くにいたので、

びよんと跳び込んだが、扉の反対側の窓——もう硝子^{ガラス}が嵌^はまっていたいかなかった——からもんどり打って抜け出した。その後からすぐに牝猪が続き、礼拝堂の中を家鳴り震動させた。仕立屋の方はその小さな建物をさあつと廻って、扉の前にぱつと到着、急いでこれをぱたと閉ざし、かくして物凄^{もの}い野獣をちいぢやな教会に監禁した。それから狩猟の同勢のところに行き、自分の偉業を告げた。猟師たちはそこへ出向いて、事の次第が全くもってその通りであることを確認、びっくり仰天して都へ戻り、王にご注進申し上げた。大胆不敵な戦人がまたしても首尾良く功名手柄を挙げた、という報せが、王様を喜ばせたか、それとも悲しがらせたか、血の巡りがそう良くなかったって、だれにも簡単に分かるよね。だって、こうなつては仕立屋に姫君を娶^{めあ}わせなくてはならなくなつたし、さもなければあちらは、かくも驚嘆すべき実例を三つも示した豪勇ぶりをこちらへ振り向けかねないからなあ。しかしながら、これは疑いも無いことだが、この英雄が一介の仕立屋だということを、王がよくよく承知していたら、姫を進呈するより頸をくくる方が増した、と思つたことだろう。もつとも仕立屋としては、氏素性の無い——母親から生まれたつてことは確かだけれど——男に娘をやることを王が気にしようがすまいが、喜ぼうが喜ぶまいが、そんなことは大して、あるいは全然問題じゃなかった。とにかく王様のお婿さんになるつてのは自慢だつたし、嬉しかつた。こういうわけで、王家側としてはあんまりめでたくはないものの、華燭の典が挙げられて、仕立屋は王の婿殿、いや、王様にあいな



った。

大して時が経たないうちに若い王妃は、背の君である御前様が寝言を言うのを耳にした。それもはっきりこんな言葉が聴き取れたのだ。「おい、やつこ、胴着を仕上げな——洋袴ズボンを繕つくろえ——さっさとしやがれ——さもないとあたしやあ——この物差でてめえの横つ面あ引っぱたくぞ」。若い王妃はこれになんとも合点が行かなかつたが、そのうち、旦那様は仕立屋なのじゃないかしら、と気づき、このことをお父様の王に打ち明けた。話を聞いて王の胸は張り裂けんばかり。一人娘を仕立屋風情ふうせいに連れ添わせておかなきゃならないとはなんたることだ、とね。で、できるだけ姫を



慰め、こう言った。次の夜は寢室の扉を開けておきなさい。戸口に家来を何人か控えさせる。そなたがまたもやそうした言葉を聴き取ったら、家来たちに押し入らせて、さっさと夫を始末してもらうのだ、と。若い奥方は承知してそのように手配した。さて、こちらの王には仕える盾持35ちが一人いたが、これは仕立屋に忠実だった。あちらの王の不実な話を聴き、急いで若い王の許に行き、その身に宣告された、そしてこれから執行される重い判決を暴露し、手を尽くしてお体をお守りになれますよう、と懇願した。仕立屋の王様は警告をしてくれたことに大いに感謝、こういう事態に対してはどうすればよいか、ちゃんと心得ている、と答えた。夜になると、若い王はお妃ともどもいつもの時刻に寢所に引き上げ、すぐに眠ったふりをした。すると奥方はこっそり起き上がり、扉を開き、それからまたひっそりと横になった。暫くすると若い王はまたまた寝言を言い始めた。ただし、部屋の外にいる連中によく聞こえるようにははっきりした声で。「おい、やつこ、洋袴ズボンを仕上げな——繕つくろぎを当てろ——胴着によ、さもないやあたしやあこの物差でてめえの横つ面あ引っぱたくぞ。あたしやあな

——一打ちで七つ——叩き潰したんだ——二人の巨人を——ぶち殺したんだ——一角獣をとつ捕まえた——牝猪も捉
まえた——そのあたしが怖がるってのか——この部屋の外にいる連中なんぞをよ」。

部屋の前でこんな科白を聴かされた男たちは、千匹もの悪魔に追っ掛けられているかのように逃げ出すほか致し方
なく、仕立屋に打って掛かろうなんてのは一人もいなかった。そういう次第で勇敢な小男の仕立屋はそれからずうつ
と生涯の間、そうして世を終わるまで王様のままでおりましたとさ。

二 七人のシュヴァーベン男の昔話^{メルヒェン}

原題 *Das Märchen von den sieben Schwaben.*

KHM 一一九「シュヴァーベン七人男」Die sieben Schwaben に相当するため訳出せず。

三 肝臓を食べちまったシュヴァーベン男の話

原題 *Vom Schwaben, der das Leberlein gefressen.*

KHM 八一「のんきぼうず（戦友ルステイヒ）」Bruder Lustig に相当するため訳出せず。

四 泥棒の親方の認定試験

原題 *Die Probestücke des Meisterdiebs.*

KHM 九二「泥棒の名人（泥棒の親方）」 ^{Meisterdieb} Der Meisterdieb に相当するため訳出せず。

五 魔法に掛けられたお姫様

昔むかし貧しい手職人がおった。倅せがれが二人いて、一人は善い子で名前はハンス、もう一人は悪い子で、これはヘルメリヒと言った。けれど世の中はえてしてそういうもんだが、お父ちちつつあんは善い方より悪い方をずっと可愛がった。

さて、ある時いつもより諸色しよしきの値が高い歳があつて、親方の財布はすつからかんになつちまつた。そこで考えた。やれやれ、暮らしは立てなくっちゃなあ。お顧客とくさんがこつちへ来てくれないんなら、あつちに足を運ぶのが礼儀でもんさな、と。思い立ったが吉日。朝早く出掛けて行つて、立派なお屋敷の扉をいくつも叩いた。ところが、とても立派な旦那衆がとつても払いがいいわけじゃない、というしだいで、だれも勘定を済ます気がない。そこで手職人はへとへとになって夕刻在所に戻り、しょんぼり独りつきりで居酒屋の戸口の外に腰を下ろした。なにせ、常連客とおしゃべりする気分にはなれなかつたし、女房のがっかり顔を眺めるのもあまりぞつとしなかつたのでね。ところが物思いに沈んで座っていたものの、店の中で交わされている会話を聞かずじまいにはできなかつた。ちやうど都から着いたばかりの余所者よそもがこんな話をしていたのである。綺麗な王女よこしま様がある。邪よこしまな魔法使いの虜囚とりこにされて、魔法使いの出す三つの問題をだれかが解かなければ、生涯地下牢にいななくてはならない。でもそういう男が現れれば、姫君も、それから姫君のすばらしいお城も宝物ごと頂戴できるのだ、と。親方は最初のうちこそ上の空で聞いていたが、それから片耳を貸し、果ては両の耳をぴんとおっ立てて傾聴した。ても、わしの倅せがれのヘルメリヒは、やつてみる、と言われたら、牡羊の髯ひげだつて剃れるほど利口者、賭けてもいいが、やつならその問題を解いて、綺麗なお姫様のご亭主に納まり、国と民草の殿様になるだろう、だつてお姫様のお父上の王様ふれがさうお布告を出したんだからな、



と考えたので。——すたこら家に帰った親方は、新しい話で頭が一杯、売り掛け代金やお顧客のことは忘れてしまい、急いでおかみさんに打ち明けた。そうして翌朝にはもうヘルメリヒに、この壮行のために馬と武具を用意してやろう、と言ったもの。ヘルメリヒの旅立ちはなんともかんとも早かった。別れを告げながら彼は両親に向かって、六頭立ての馬車でとんまの弟ともども⁽³⁶⁾すぐに引き取りに来るからね、と約束した。もう王様になったような気分だったんで。さて、大はしゃぎで進みながら、道で出くわすありとあらゆるものにひどいことのし放題。枝に留まって自分たちには分かる唄で天にまします神様を誉め讃えている鳥たちを鞭を振るって木から追い散らす。行き逢う動物でこいつに悪ふざけを仕掛けられないのはいない。まず出合ったのは一つの蟻塚。これを馬で踏み潰す。怒った蟻たちは馬とそれから人間自身の体にも這い上がり、人馬双方を噛んだけれど、どれもこれも叩き潰し、押し潰す。それから清らかな池にやって来ると、そこでは十二羽の鴨が泳いでいた。ヘルメリヒは鴨を岸辺におびき寄せ、そのうち十一羽を殺した。十二番目だけは逃げた。最後に見つけたのは蜜蜂の巣。すると蜜蜂たちにも蟻と同じことをやらしたもんだ。こんな具合に、罪の無い生き物を何かの役に立てるのではなく、ただただいたずら心から苛めてめっちゃめっちゃにしちまうってのが、お気に入りのお楽しみだったわけ。



日暮れ時、王女様が魔法に掛けられている壮麗なお城に到着すると、ヘルメリヒは閉ざされている扉を乱暴に叩いた。しいんと静まりかえっている。騎手はますます激しくどんどんやる。やっとこさ上げ下げ窓が開き、蜘蛛の巣色の顔をした歳を喰ったおっかあどんが外を覗いて、一体何の用だね、と不機嫌に訊いた。「お姫様を救い出すんだ」とヘルメリヒがどなる。「さっさと開ける」。「急がば回れさ、お若いの」と婆さんが言う。「あしたって日もあるによ。九時にここに来な」。そうして引き戸を開めたもの。

翌朝九時、ヘルメリヒがまた姿を現すと、おっかあどんはあまに亜麻仁あまにがぎつしり入った小樽を用意して待ち構えていて、これを派手にぶちまけた。「種を拾い集めるがええ」と騎手に言いつける。「一時間したら戻って来るだで。それまでに仕事を終わつとかなくちやいけねえだ」。けれどもヘルメリヒは、こりやあ愚にもつかない冗談だ、こんなことのためにしゃがみこむのは引き合わないや、と考え、その間ぶらつきに出掛けた。そこで婆様が戻って来た時、樽

は相変わらず空っぽだった。婆様いわく「こりやよかない」。次には相変わらず空っぽだった。婆様いわく「こりやよかない」。次に懐から十二本の黄金の鍵を取り出すと、深くてよどんだ城の池に一つ一つ投げ込んだ。「鍵を拾い上げるがええ」と婆様。「一時間したらまた来るだで。それまでに仕事を終わつとかなくちやいけねえだ」。婆様は、戻って来ても難題が片付いていないものだから、またしても叫んだ。「こりやよかない、こりやよかない」ってね。それでもヘルメリヒの手を取ると、階段を上って城の大広間に連れて行つた。そこには女性の姿が三体座っていたが、どれも分厚いヴェール面紗を被っていた。「選びな、お若いの」と婆様。「だが、ちゃんと

選ぶように気を付けるだあよ。一時間したら戻って来るで」。ヘルメリヒは相手が戻って来ても、いなくなる前より利口になっていたわけじゃなかった。でも行き当たりばったりで意気揚揚とこう叫んだ。「右手の選ぶぞ。——すると三体はどれも面紗ヴェールを上げた。真ん中に座っているのは世にも愛らしいお姫様だったが、右と左はおつかない二頭の龍で、右手の龍はヘルメリヒを鉤爪で引つ摑むと、窓越しに奈落の底へ投げ込んだ。

ヘルメリヒが王女様を救いに出掛けてから一年経ったが、両親の許には相変わらず六頭立ての馬車は来なかった。「ああ」とお父ととつあんが嘆いた。「うちの飛び切り上等の俵せがれの代わりにぶきつちよなハンスが出掛けていりゃあなあ。そしたらこの不幸せもいくらか増しだったろうが」。「お父つあん」とハンスが言った。「おいらを行かせておくれ。おいらも試してみる」。でも父親は気が進まなかった。だってね、利口者が失敗したことをぶきつちよなのがやり遂げられっこないもんな。父親が馬も武器もくれなかったので、ハンスはこっそり出発、兄が馬で旅したのと同じ道を三日掛けててくてく歩いて行つた。でも怖くはなかった。そして毎夜、柔らかな苔の上、緑の枝枝の下で、両親の家の屋根の下でと同様、安らかに眠つた。森の鳥たちは彼を恐れ憚らず、寝ている彼にこの上なく素晴らしい唄を歌って聞かせてくれた。例の蟻たちのところに来ると、この連中は新しい住まいを作り上げようと一所懸命だった。彼は邪魔なごせず、手伝つてやろうとした。ちいちゃいのが体に這い上がって来ると、噛んだりしても、殺さないでつまみ取つた。彼も鴨たちを岸辺に誘つたが、これはパン屑を餌にやるためだった。蜜蜂たちには路傍で摘んだ新鮮な花を投げてやつた。こうしてハンスはいそいそと王宮にやつて来て、慎重しやかに引き戸を叩いた。すぐさま扉が開いて、婆様が要件を訊ねた。答えて「こんなおいらでよかつたら、綺麗なお姫様を救い出せるかどうかおいらも試してみたいんですが」。「試してみりゃええだ、お若いの」と婆様。「だけんどなあ、三つの問題をこなせなかつたら、命にかかわるだに」。「さあ、おつかさん」とハンスが言う。「何をすればいいのか言つてください」。すると婆様はあの



亜麻仁の難題を出した。ハンスはしゃがんでせつせと拾ったが、四十五分過ぎても樽は半分も一杯にならなかった。そこでハンスは気が挫けそうになった。ところが突然黒い蟻たちがうんとこさ出て来て、ものの数分で地面には一粒も残らなかった。婆様は戻るなり、「こりゃええ」とのたまって、例の十二の鍵を池に投げ込み、一時間で掬い上げるよう言いつけた。しかしハンスは池から一本の鍵も拾い出せなかった。どんなに深く潜っても、底まで行き着けなかったのだ。がっかりして岸辺に座り込むと、あの十二羽の鴨が泳ぎ寄った。どれもが、^{くちばし}嘴に黄金の鍵を一本づつくわえていて、それを濡れた草の中に落としてくれた。こうして難題は解決したわけで、戻って来た婆様は今度はハンスを広間に案内した。そこでは三番目の、一番難しい問題が待ち構えていた。ハンスは三体の同じ^{ヴエール}面紗姿を眺めて気落ちした。ここで自分を助けてくれるのはいなさそうだったからね。そこへ開いた窓から蜂の一群が飛んで来て、広間をぐるりと回ると、^{ヴエール}面紗を被った三体の口の周りでぶんぶんいった。でも、右のと左のからはすぐさま飛び退いた。だって、龍つてのは食べ物にしている



瀝青ビシチと硫黄⑩の臭いがぶんぶんしてるでしょ。蜂は皆真ん中の姿を取り巻いて、低くぶんぶんわんわん「真ん中の、真ん中の」と唸ったの。なぜってお姫様が大好きで召し上がる蜂自身の蜜の良い香りが薰ったから。そう、そういうわけで、婆様が一時間後に戻って来ると、ハンスは落ち着き払って、「おいら、真ん中のを選びます」って言ったのさ。そこで邪悪な龍どもは窓から外へ出て行き、綺麗な王女様はというと、面纱ヴェールをかなぐり捨て、救われたことと綺麗なお婿さんをもたらったことを嬉しがった。そしてハンスはお姫様の父君に大至急の使者を、自分の両親には六頭の馬が牽く黄金の馬車を遣わした。そうして皆華やかに楽しい暮らしを送りましたよ。もし死んではいないなら、今でも生きてることでしょう。

六 悪魔がおつ放ばなされた、あるいは、悪魔が火酒ブランドウアイを発明した話

昔むかし二人の領主が領境争いをやつとつた。どっち側にも権利を主張する証人たちがおつた。その中の二人は悪魔から黒魔術を教えてもらい、その代わり証文に署名して悪魔に魂を売り渡していた。

この兩人、ある時めいめい、自分たちが言い張っている通りのまやかしの境界標石さかいのしるしを据えようと思ひ、黒魔術で石がもう何年も何年も前から立っていたみたいに見えるよう細工することにした。そこでどちらもお火男ひおとこの姿になり、丘の上へと出掛けたもんだ。で、片っぽが着いてみると、もう片っぽも来ていた。でもどちらも相手が同じことを考えているなんてお互い知らなかった。

片っぽがもう片っぽに訊いた。「おぬし、何をしとる」。

「なんだつてそんなことを訊く。おぬしこそ何をしようつてのか、先に言うがいい」。

「境界標石を据えようというのさ。そして領地境まがひの線を引くのだ。本来そうなくつちやならんようにな」。

「そいつはもうわしがやった。境界標石はこう立つておる。そこで領地境の線はこう走つとる」。

「そりや間違ひ。領地境の線はこういう風に走つとるのだ。わしのご主人は、わしが正しい、譲るんじやない、とおっしゃるわさ」。

「おぬしのご主人でな、一体だれた。さぞかし立派ムシキなださんおだらうて」。

「悪魔だよ、わしのご主人は。これで頭を下げる気になつたか」。

「そりや嘘だ。そりやわしのご主人のこと。わしのご主人は、わしが正しい、譲るんじやない、とおっしゃるわさ。さつさと失せろ、さもなきやおぬし、まづいことになるぞ」。

そこで二人は喧嘩になり、とどのつまり片っぱの火男がもう片っぱの横つ面をぶん殴ったので、そちらの頭が吹っ飛んで、山のてっぺんから下までころころ落ちた。そこで頭の無い火男は自分の火頭ひあたまの後を走って追いかけて、頭をとつ掴まえて、二元通りに乗っけようとした。でもどうしても追いつけず、とうとう麓の掘割まで転がり込んだ。

さて片っぱがもう片っぱの横つ面をぶん殴り、そちらが自分の頭を追って走って行くと、突然三人目の火男が出現、山の上にいる方に「おまえ、何をやらかした」と訊いた。

「それがあんたに関わりがあるのかよ。それにわしにどうして命令なんぞ。とつと消えてなくなれ。さもなきやさっきのやつと同じ目に遭わせてくれるわ」。

「このすつとことどつこい。おまえはおれさまにもう頭を下げないのか。おれさまがおまえのご主人の悪魔だつてことが分らないのか」。

「あんたがその十倍も悪魔だろうと、わしや全然どうつてこたあない。なんならわしの体をちゃんと綺麗に払ってくれてもいいな」。

「お情けにそうしてやるが、このことは生涯忘れるなよ」。

そして悪魔はやり始めて、男を綺麗に払ってやったので、火の塵が山の背一面に飛び散った。

でもこうやって綺麗にしてもらった我が火男はうまいこと隙を見つけて悪魔にぐいと手を伸ばし、頸根つこを掴んで、身動きできなくすると、こう言った。

「さあて、これであんたはわしの思うがままだ。人間様の手に落ちたつてことを肝に銘じさせてやるわ。あんたはこれまでずうつと哀れな連中の頸を捻ひねつて来たが、今度は頸を捻ひねられるつてことがどんなものか、自分でも味わつてみるこつた」。

そこでやり始めて、悪魔の頸を捻ろうとした。悪魔は火男が本気なのを見て取ると、平謝りして、どうか逃がしてくれ、頸を捻らないでくれ、やって欲しいことがあるなら何でもするつもりだ、とすこぶる甘い言葉を並べ立てた。そこで男は悪魔に言った。「そう憐れっぽく頼むなら、まあ逃がしてやろうわさ。だが、その前に、わしが署名した、あんたにわしの魂を売り渡すつちゅう証文を返してくれなくちゃいかん。それから、もうわしと関わりを持たん、今後ずうっと人間に魂売り渡しの契約をまたとさせない、と約束しなけりやならん、いや、あんたの祖母様（18）に懸かけていつを誓ってもらわなくてはな」。

悪魔としては、否いや応おうなく窮きゆう地に嵌はまり込んでしまったわけ。自由にしてもらいたかったし、頸を握にぎられたくなかったから、酸いんっぱい林檎りんごにかぶりつかざる「いやなこともやらざる」をえなかつた。そこで証文を返却、もう男と関わりを持たない、今後ずうっと人間に魂売り渡しの契約をまたとさせない、と約束し、自分の祖母様に懸かけて誓ちかいを立てた。悪魔がこうしたことを全て済すますと、男は彼を放してやった。

さて、悪魔はまた自由になると、二度と不意打ちを喰くわされないようにびよんと飛び退き、仁王立ちになると、こう言った。「さて、これでおれさまはまた自由になった。こんちくしよめが。確かにおれさまはおまえに証文を返してやったし、もうおまえと関わりを持たない、と約束もし、誓ちかいもしたが、また自由になっても、おまえの頸を捻ろうとはしないと約束した覚えはないぞ。そこでこの場でたつた今おまえをくたばらせてやる。おまえがおれさまに咽喉をごろごろ言わせて、この頸を捻ろうとした礼にな」。

こう言うなり悪魔は男に飛び掛かつておだぶつにしてやろうとしたが、男はさつと身かわし、森の中へ逃げ込んだ。悪魔はどこまでも追おっかけた。結局振り切れないと悟わつたところで、男は古い櫛かみの樹いの許もとに来た。これは中が空洞うつつろで下に穴が一つ開あいていた。そこで男は急いいで中に這はいずり込んで、悪魔から体を隠かくそうとした。けれどもそっくりは

入り込めず、まだ爪先が外へ突き出していた。そして身体がすっかり燃えていたものだから、足指は夜の闇に赤赤と輝いていた。そこで悪魔は男がどこに隠れたのか気がついて近寄り、爪先をとつかまえてしまった。しかし、悪魔がそろりそろりと探り足でやって来て、手を伸ばし、自分を捉えようとするのを、樹の中で聴き耳を立てていた方は、完全に体を引き入れて、更に樹の中を上へと昇り始めた。そこで悪魔も這いずり込んだ。男がどんどん樹の洞を上に昇れば、悪魔もどんどん後を追う。とどのつまり、この樹はつぺんに大きな穴があったので、男はここまで辿り着き、そこから外に這い出した。外に出るなり男は、自分が抜け出した穴に何かで楔を打ち込み、すばしこく下へ降りて、根元の穴にも楔をかかった。それも黒魔術でしっかり仕上げたので、悪魔自身も、悪魔の祖母様も、地獄が総掛かりになっても開けられなかった。それから男は好きのところへ行ってしまった。

てなわけで、悪魔は櫛の古木に閉じ込められたまんま、出て来ることができなんだ。どうあがいても無駄なこと。ずうっと中に閉じ込められていなけりやなんだ。で、こうやって長い間閉じ込められていた。その頃は、人人が例の山越しの道を辿るたびしばしば、己が住まいにされた櫛の樹の中で悪魔が、へえへえへえ、ぐうぐうぐう、と啼いたり呻いたりするのを耳にしたもの。けれどもとうとうここで伐採が行われることになり、この櫛が伐り倒された。そこで悪魔はやっとさまた外へ出て、自由の身に戻ったわけ。こうして再び解放されると、まっしぐらに古巢の地獄へ戻り、どうなってるか検分しようとした。でも地獄は平日の教会みたいにすっからかんの空っぽで、魂の声も聞こえないし、影も形も見えはせぬ。悪魔がいなくなつて、二度と姿を現すことなく、どこへ行ってしまったのかだれにも分からなかったあの時以来、たった一つの魂さえもはや地獄に墮ちなかつたのだ。それに悪魔の祖母様は気落ちしたせいで死んでしまい、祖母様が亡くなると、その頃地獄にいた哀れな魂たちは皆仕度を調べて出発、連れ立って全員天国に入ったのである。そういう次第で悪魔は地獄の中で天涯孤独・独りぼっち・孤影悄然てなありさま、どうや



つてこれからまた魂を手に入れたものやら、しょんぼり途方に暮れた。だってもうやっではならなかったのだからね。あの時祖母様に懸けて、もう人間と魂の売り渡し契約をしない、って誓ったんだし、だからといってその頃は他の遣り方じゃあ人間を地獄に來させることはできなかったんで。とほんと突っ立って心労は果てしなく、懊惱苦惱のあまり頭から二本の角を引っこ抜きたいくらいだった。——と、突然あることを思いついた。

あの櫛の古木に閉じ込められて外へ出ることができないでいると、時間はなんとも長いもの。そこで悪魔はあらゆることにとっくり思案を凝らし、^{プロントワイン}火酒を案出、発明したのさ。そのことを悲嘆の真つ最中にどんびしやり思い出し、こいつはまたまた哀れな魂どもを地獄に來させる手管になるに違いない、と考えた。

そこで彼はすぐさま仕度を調べて出発、地獄はうっちゃらかしておいて、ノルトハウゼン¹⁶目指してえっさらさ、^{シュナップス}火酒醸造屋になり、以降ずうっと^{プロントワイン}火酒を製造、これを世間に送り出した。それからノルトハウゼンの町の衆一同に、

火酒シネナップスの作り方を教え、彼らがこれを習得して火酒フランドウワインを醸造すれば、どつさり金カネが儲かる、と約束した。ノルトハウゼンの市民たちはこの申し出を二度まで言わせず、全員火酒醸造屋シネナップスになり、火酒フランドウワインを拵つとえて、世間に送り込んだ。今日に至るまでノルトハウゼンでは極めて多量の火酒フランドウワインが生産されており、こんなところは世界中他にどこにもないが、この時がその濫觴はじまりなのである。

ともあれ、悪魔が考えた通りにあいなった。人間どもがまずちよつぱり火酒フランドウワインをきこしめすと、罵詈雑言ばりざうごんやら誓言ちかごやらをがなり出す。で、おいらの魂たまなんぞ悪魔にくれてやらあ、てな罵りや誓ちかごいだもんだから、連中が死んでしまうと、悪魔が彼らを頂戴ていだいいたすわけ。そして悪魔はこれまでは、哀れな魂を手に入れようと思つたら、こいつらに仕えなきやならなかつたのだが、そうしなくつてよくなつた。かてて加えて、人間どもが頭をたつぱり火酒フランドウワイン漬ひけにすると、決まって喧嘩けんかを始め、殴り合いになり、自分で自分の頸のどをおつぺしよるので、悪魔は更に苦勞くろう知らずで、彼らの頸を捻ねる必要がなくなつた。以前悪魔は毎週一回哀れな魂を一つ地獄に迎え入れることができる程度ほどだったけど、こうなると毎日うようよぞろぞろ、わんさかわいわいわつて来るので、一年と経たないうちに地獄は満杯まんぱいになり、悪魔は魂どもを収容しゆうようしきれず、まるまるもう一階分建たて増しをしなければならなくなつた。

で、まあ、手つ取り早く申し上げれば、あの折悪魔が櫛くしの古木ふるきからまたおつ放はなされてからこのかた、火酒フランドウワインなるものが出現したわけで、火酒フランドウワインが世にあるようになってこのかた、いよいよもつて文字通りこう言えるようになったしだい。「悪魔がおつ放はなされた」「さあ、ことだ(48)」つてね。





七 ユーターボックの鍛冶屋

小さな町のユーターボック⁽⁴⁹⁾に昔むかしのその昔一人の鍛冶屋が住んでいた。この男については不思議なお話があって、子どもたちもお年寄りも物語る。鍛冶屋さん、初めはうら若い青年で、父親はとても厳しかった。でも、この御仁、神様の十戒をちゃんと守った。長旅を何べんもやってのけ、冒険もたくさん体験、それとともに途方もなく腕を磨き、技術⁽⁵⁰⁾を練り上げた。ある種の鋼鉄塗料を持っていたが、こいつはそれを塗るとどんな武器でも甲冑を貫けなくなる代物。そこで皇帝フリードリヒ二世⁽⁵¹⁾の軍勢に加わり、皇帝専属の武器師になり、ミラノ⁽⁵²⁾とプリア⁽⁵³⁾への遠征にも随行した。その地で都市同盟軍の本管用輜重車⁽⁵⁴⁾を略奪、皇帝が崩御すると、金銀財宝をたっぷり携えてやっとこさ故郷に戻って来た。順風満帆の暮らしを送ったが、それからまたどうにも風向きが悪くなって、百歳を越した。ある日、自分の家の庭の梨の古木の下に座っていると、これまでも何度か鍛冶屋の守護霊であることをはっきり示してくれた白髪の小男が驢馬にまたがってやって来た。このおひとは鍛冶



るんじゃないよ」と警告した。三番目の願いごとになると、鍛冶屋のいわく「肝心なことってのは上等の火酒シユナツプスさねこの塚びんが決して空っぽになりませんように」。——「そなたの願いは聞き届けられた」と小男は言った。それからさらに仕事場に転がっていた何本かの鉄の棒を撫で、驢馬にまたがって立ち去った。その鉄はぴかぴか光る白銀に変わった。これまで貧乏だった鍛冶屋はまた金持ちになり、ずうつとずうつと達者で暮らした。てのは、決して尽きることのない塚の中の食欲増進剤は、ついで気が付かなかつたが、不老長寿の霊薬だったのさ。とうとう死が扉を叩いた。どうやら長いこと親方のことを忘れちゃっていらしい。鍛冶屋はうわべは喜んで死と一緒に旅立つふりをしたけれども、ちよいとさっぱりしたものを差し上げたい、あの木から梨の実を二つ三つ採ってください、自分はもう寄る年波もいとこなんで登ることができないから、と頼んだ。死が木の上に登ると、鍛冶屋は「上にずつとおれ」と唱え

屋の家に泊まり、驢馬に蹄鉄を打ってもらった。鍛冶屋は料金なんぞ請求せず、喜んでそうした。すると小男はペーター(9)に向かい、願いごとを三つするがいい、でも、肝心なことを忘れてはいけない、と言った。そこで鍛冶屋は、泥棒どもによく梨の実を盗まれたので、梨の木に登った者は彼が、そうしろ、と言うまで木から下りられないように、と願った。——それから、これまたたびたび部屋の中で盗難に遭ったものだから、彼の許しなしにはだれも部屋に入れないように、鍵穴からならいざ知らず、と願った。こうしたばかげた願いごとのつど、小男は「肝心なことを忘れた

た。だって、もつと長生きしたかったものね。死は木に生なっている梨を皆食べ尽くしてしまうと、断食を始め、腹が空いて空いて骨と皮までに痩せ衰えた。そういうしだいでも今もあんなにいやらしいがりの骸骨なんだよ。でもこの世ではだれも死なくなっちゃまった。人間も動物もな。そこでどっさり災いごとが起こった。やつとこさ鍛冶屋は骨をかたかた鳴らしている死のところへ行つて、今後は自分をそつとしておくこと、と協定を締結、それから死を自由にしてやった。死はかんかんになって逃げ出して、この世の片づけ仕事に取り掛かった。で、鍛冶屋に仕返しをするわけには行かなかつたので、やろうを攫さらつてしまいなよ、と悪魔を親方の頸くびつ玉にけしかけたものさね。悪魔はすぐさま出掛けて来たが、狡賢い鍛冶屋は硫黄の臭いを嗅ぎつけ、家の扉を閉めてしまい、住み込みの職人たちと一緒に革の袋を一つ鍵穴にあてがった。他には鍛冶屋のところに侵入する手立てはなかつたので、ウーリアン殿（56）がここに潜り込むと、袋の口がぎゅつと結ばれ、鉄床かどこへと運ばれた。そしてまことにもって情け容赦なく悪魔目掛けて一番重い槌が幾つもがんがん振り下ろされたので、悪魔はぼうつと気が遠くなつた。すっかりよれよれになつちまつた悪魔は、未来永劫またと参上いたしません、と誓言した。こうして鍛冶屋はとつても長いことのおんびり暮らしたが、やがて友だちも知り合ひも皆死んでいなくなると、この世の生活にほとほと飽き飽きした。そこで出発して天国へ向かい、到着すると慎ましやかに門をほとほと叩いた。すると中から外を覗いたのはペトルス聖者（56）。鍛冶屋のペーターは、これが自分を窮地や危難からしばしば靈験れいげんあらたかに救つてくれ、最後には例の三つの願ひごとを叶えてくれた守護聖者、守護霊だつて分かつた。でもペトルスは今度はこう告げた。「立ち去るがよい。天国はそなたには閉ざされておる。そなたは肝心なこと





も隠遁場所が見当たらなかつたし、さりとてこの世は住み心地がよくなさそうなので、キフホイザー⁽⁵⁸⁾なる昔ご奉公した皇帝フリードリヒ⁽⁵⁹⁾の許に赴いた。ご主君の老皇帝は専属の武具師ペーターが参上したのを見て御気色麗しく、すぐに、鴉どもはまだキフホイザーの廃墟の塔の周りを飛んでおるか、とご下問あそばされた。ペーターが、飛んでおります、と言上すると、赤髯^{ロートハルト}は嘆息した。それでも鍛冶屋は山の中に留まり、皇帝の換え馬や皇女らの馬たち、それから騎乗している腰元衆の馬たちの蹄に蹄鉄を打つ仕事を続けている。やがて、皇帝が解き放たれる時の至るまで。

——伝承によればこれが成就するのは、いつか鴉どもが山の周囲を飛び回らなくなり、キフホイザーにほど近いかのラーツフェルト⁽⁶⁰⁾にある乾涸^{ひから}びた梨の古い枯木が再び芽を吹き、緑の葉を付け、花咲く時。そうなつたら皇帝は武装した全軍を引き連れて姿を現し、祖国解放の一大合戦を行い、その盾をまたも緑^{したた}滴^たるようになったかの木に掛けるのだ。かくてのち、皇帝は扈從^{こしやう}の部下もろとも永遠の憩いに就くのである。

を頼むのを忘れた。すなわち、淨福⁽⁶¹⁾をな」。こう言い渡されたペーターは回れ右をして、地獄で運試しをやらかそう、と下へ降ることにした。間もなく、迷いつこない、広い、よく踏みならされた道が見つかった。けれど、ユーターボックの鍛冶屋が接近中と知った悪魔は、地獄の門を親方の鼻先でどーんと閉ざし、地獄に防禦体制を施行。ユーターボックの鍛冶屋さんは天国にも地獄に

八 ヘンゼルとグレーテル

原題 *Hänsel und Gretel.*

KHM一五「ヘンゼルとグレーテル」Hänsel und Gretelに相当するため訳出せず。

九 赤頭巾

原題 *Das Rotkäppchen.*

KHM二六「赤頭巾」Rotkäppchenに相当するため訳出せず。

一〇 老魔法使いと子どもたち

昔むかし邪よこしまな魔法使いがいた。随分以前にいたいけな子どもたち二人、男の子と女の子を攫さらって来て、一緒にとある洞窟で孤独に引籠もって暮らしていた。こやつ、この子らを、なんとも傷いたましいことに、魔物に捧たげる誓約をしていたのだ。その厭いとわしい魔術はある魔法書をもとに修練したもので、この本をなにより大切な宝としてしまいこんでいた。

けれども、老魔法使いが洞窟から遠くへ出掛け、子どもたちだけが留守をするようなことがあるたび、老人が魔法書をどこへ隠すかかねてから探り出していた男の子は、その本に読み耽り、黒魔術の呪文・まじないの数数をまことに少なからず習い覚え、自分でもとても巧みに魔法を使うすべを学んだ。さて、老人は子どもたちをめつたに洞窟から外に出さず、魔物の生贄いけにえとして供える日まで捉まえたままでおこうとしたので、それだけ一層二人はここを立ち去りたくて堪らず、どうすればこっそり逃げ出せるか、相談を重ねた。そしてある日のこと、魔法使いがとっても長い間洞窟をあとにした時、男の子は妹妹にこう言った。「今こそもってこいだよ、可愛い妹。ぼくたちをこんなに酷むごく捉まえたままにしているあの悪いやつはいない。だからこれから出発して、ぼくたちの足が続く限り遠くまで逃げよう」。子どもたちはそうやって逃げ出し、丸一日とつとこ歩いた。

午後になって魔法使いが帰って来、すぐに子どもたちがいないのに気付いた。ただちに彼は魔法書を開き、子どもたちがどのあたりへ行ったか読み取り、実際すんでのところ追いつきそうになった。早くも老人の怒ったどなり声が子どもたちの耳に届いたので、妹はぎよっとして身がすくみ、「お兄ちゃん、お兄ちゃん、もうあたしたちおしまいよ。あの悪いやつがもうすぐ近くに来たわよう」と叫んだ。すると男の子は例の本で覚えた魔術を使い、呪文を唱え



た。するとたちどころに妹は魚に、自分自身は大きな池に変身、この池の中を小さなお魚が元気に泳ぎ回った。

池のほとりにやって来た老人は、騙しの術に掛けられているのにちゃんと気付き、腹を立ててぶつぶす言った。「待ってろ、待ってろ、どうしてもおまえたちを捉まえてやるぞ」。そして、網を持って来て、それで魚を掬おうと、大急ぎで洞窟に走り戻った。でも魔法使いがいなくなると、池と魚は元通り兄と妹の姿に戻り、うまい隠れ場所を見

つけてぐっすり眠ると、翌朝になると旅を続け、
またもや丸一日とつとこ歩いた。

邪な魔法使いは網を携えて、ちゃんと気付いたあの場所に来たが、池はもう見えず、緑の野原があるばかり、そこには確かに蛙は何匹もいたけれど、捉まえる魚はいなかった。そこで老人は前よりもつかんかんになり、持って来た網を投げ捨てると、子どもたちの跡を追っかけた。子どもたちの行方は分かっていた。だって、手にしている魔法の笞むちが正しい方角を教えてくれたからさ。

そこで夕方になると、歩いている子どもたち
にすんでのところ追いつきそうになった。早くも老人のいきまいたり、どなったりする声が子



どもたちに聞こえたので、妹はまた叫んだ。「お兄ちゃん、大好きなお兄ちゃん、もうあたしたちおしまいよ、あの憎い仇がすぐ後ろにいるわよう」。

そこで男の子はまたしても例の本で覚えた呪文を唱えた。すると自分は道端に建っている礼拝堂になり、女の子は礼拝堂の祭壇の綺麗な「聖母マリアの」画像になった。

さて礼拝堂にやって来た魔法使いはまたまたおちよくられているのにちゃんと気付き、ものすごくがなり立てながら、お堂のぐるりを走り回った。でも、中に踏み込むことはできなかった。魔法使いどもが魔物と取り交わす契約には、教会や礼拝堂に入ってはならない、いつも記されていたのだから。「きさまの中に踏み込まないとあらば、松明たいまつを押し付けて火をつけ、灰にしてやるわい」。そう金切り声を張り上げた魔法使いは、洞窟から松明を持って来よう、と走り去った。

老人がほとんど一晩中駆けている間に、礼拝堂と祭壇の綺麗な画像は元通り兄と妹の姿に戻り、隠れ場所を見つけて眠り、三日目の朝になると旅を続け、丸一日とつとこ歩いた。一方魔法使いは長い道のりをこなして改めて子どもたちを追っかけた。礼拝堂が建っていた場所へ松明を持って到着すると、鼻を大きな巖にぶっつけた。この巖じゃあ、松明を押し付けて火をつけ、灰にするわけには行かなかった。それからこやつ、怒り狂って走るは走るは、どんどん子どもたちを追っつけた。

夕刻魔法使いがすぐ近くまでやって来ると、これで三度目だけ妹は怯えきって、

もうだめ、と思ひ込んだ。でも男の子の方はまた例の本で覚えた呪文を唱えた。すると自分は穀物束を叩く固い打穀場(6)になり、可愛い妹はちいちゃい穀粒になつて、ほつたらかされたみたいに打穀場に転がった。

そこへやつて来た魔法使いは、これで三度もおちゃらかされたのがちゃんと分かつたが、今度は長くも考えず、ま
ず家へ走り帰ろうともせず、こちらも例の本で習得した呪文を唱えた。そうして、黒い雄鷄(おんどり)に変身し、素早くその大
麦の粒目掛けて走り寄り、これを嘴(くちばし)で啄(つば)もうとした。けれども男の子はもう一度例の本で覚えた呪文を唱え、さ
つと狐の姿になり、黒い雄鷄が大麦の粒を啄まないうちに、その頭を噛み切つた。そういうわけで魔法使いは、この
お話と同じで、それつきりおしまいになつちやつたのさ。

一 一 黄金のマリーアと瀝青のマリーア

昔むかし寡婦やもめが一人いて、娘を二人持っていた。実の娘と継娘で、どちらもマリーアという名前だった。実の娘は善い子でもなけりやおとなしくもなかつたが、継娘は反対に慎ましく淑やかな少女だった。だが、こちらは母親や妹の意地悪や冷たいあしらいを我慢しなければならなかつた。しかし彼女はいつも親切で、厭な顔をしないで台所仕事をこなした。そして母親や妹からあんまりたくさんひどい仕打ちを受けると、自分のちっぽけな寝部屋でときどきこっそり泣くだけだった。それでもそのたびにすぐ朗らかで、潑潑はつぱつとした気分を取り戻し、自分自身に言い聞かせたもの。「気を落ち着けなさいな、神様がきつと助けてくださるわ」。それからせつせと仕事にかかり、万事万端きちんと綺麗に仕上げた。彼女がいくら働いても母親はしよつちゆう不満たらたらで、ある日のことこんなことさえ言い出した。「マリーア、あたしやこれ以上おまえをうちに置いとくわけにやいかない。おまえときたら、仕事はちよつぱりしかしなくせに、食べるとなつたらうんとこさ。おまえのおつかさんはおまえに財産なんぞ残さなかつただろ、おとつあんもそうだ。なにかもあたしのものさね。で、これ以上おまえを養うことはできないし、したくもない。だから、おまえ、うちを出て、どつかご大家で奉公口を探さなくっちゃね」。それから継母は灰と乳ミルクで菓子を一つ焼き、小さな壺に水を満たし、両方とも可哀そうなマリーアに差し出して、家から追い出した。

マリーアはこういう酷い目に遭わされてとても悲しかった。だけど元気に畑や牧場を歩いて行き、こう考えた。きつとだれかがおまえを女中に雇ってくれるわ。それにもしかしたら赤の他人の方がお母さんより親切かも知れない。そのうちお腹が空いたので、牧草の中に腰を下ろすと、灰のお菓子を取り出し、壺から水を飲んだ。たくさんの小鳥たちがばさばさと集まって来て、彼女のお菓子を啄つづばんだ。そこでマリーアは手に水を注いで活潑かつぱつな小鳥たちに飲ま



「入れ」と唸るように答えた。後について部屋の中に入ってみると、何匹もの犬と猫しか目に見えず、その連中のものですごい吠え声、いがみ啼きしか耳に入らないので、もつとがくがく身体が震えた。この屋敷にいるのは荒っぽいテュルシエマン⁽⁶⁶⁾（このひとの名前はそういうのだった）だけで、他にはだあれも。

テュルシエマンはマリーアに向かってぶつぶつこう言った。「だれのところで眠りたい、わしのところですか、それとも犬どもや猫どものところですか」。マリーアいわく「犬や猫と一緒によろしゅうございます」。それなのに彼女はや

せてやった。すると知らないうちに灰のお菓子は円形飾り菓子⁽⁶⁷⁾に、水は美味しい葡萄酒に変わった。可哀そうなマリーアは食べて飲んで元気を恢復⁽⁶⁸⁾、いそいそと道中を続けた。日暮れになった頃、へんてこりんな建て方の屋敷に辿り着いた。外には二つの門があり、一つは瀝青⁽⁶⁹⁾みたいに真っ黒け、もう一つは混じりけなしの黄金⁽⁷⁰⁾のようにきらきら輝いていた。マリーアは遠慮して綺麗じゃない方の門から中庭に入り、建物の扉を叩いた。がさつでおっかない顔の男が扉を開け、ぶつきらぼうに、何の用だ、と訊ねた。マリーアは震えながら「あのう、ちよいと何わせて戴きとう存じますが、ご親切に私を一晚泊めてくださいませんか」と言った。すると男は

っぱり彼のところで眠ることになった。そしてテウルシエマンは綺麗でふかふかした寢床をあてがってくれたので、マリーアはとっても気持ちよく安らかに眠った。朝になるとテウルシエマンはぶつぶつ言った。「だれと朝飯が喰いたい、わしとか、それとも犬どもや猫どもとか」。マリーアいわく「犬や猫と一緒によろしゅうございます」。すると彼女は彼とコーヒーと甘い乳脂クリームを飲むことになった。マリーアが立ち去ろうとすると、テウルシエマンはぶつぶつ言った。「どっちの門から表へ出たい、黄金の門からか、それとも瀝青ピッチの門からか」。そこで彼女は「黄金の門から出ようございます」と返辞した。すると黄金の門から出るようになったが、下を通り抜ける時、テウルシエマンが門の上において、おそろしく乱暴に揺すぶったので、門ががたがた震え、マリーアは体中べた一面黄金の門から落ちて来た黄金だらけになった。

さてマリーアが家路を辿り、生家に戻って来ると、普段いつも彼女が餌をやっていた鶏たちが飛んだり走ったりして喜んでお出迎えし、雄鶏がこう啼いた。「コケコッコー、黄金のマリーアがお帰りだ、コケコッコー」。すると母親が階段を下りて来て、この黄金づくめのご婦人の前に、忝くもご来臨たまわった王女様をお迎えするみたいに恭しく跪いた。でもマリーアはこう言った。「お母さん、一体もう私に分からないの。私、あのマリーアなのよ」。

妹もやって来たが、これまた母親同様にびっくり仰天、なんとも不思議で堪らない。そして二人とも羨ましくて羨ましくて。で、マリーアは、どんな素晴らしいことが身の上を起こったのか、どうして黄金が授かったのか、しゃべらなければならなくなった。

そういうわけで、母親はちやほやしてくれて、前より当たりが良くなった。そしてマリーアはどんな人からも尊敬され愛された。間もなく一人の実直な若者が現れ、マリーアを奥さんに迎え取り、ともども幸せに暮らした。

さて、もう一人のマリーアだけど、こっちは胸の中に妬み、やつかみがむくむく膨れ上がり、自分も出掛けて行

つて、体に黄金を貼り付けて帰って来よう、と決め込んだ。母親は甘いお菓子と葡萄酒を旅の仕度に持たせてやった。マリーアがそれを食べていると、小鳥たちがお相伴しようとして飛んで来たが、こっちはそれをしつしつと追い散らした。でもそのお菓子は知らないうちに灰に、葡萄酒はまずうい水に変わってしまった。夕方マリーアは同じようにテュルシエマンの屋敷の二つの門のところに辿り着いた。彼女は威張って黄金の門から入り、建物の扉を叩いた。テュルシエマンが扉を開けて、何の用だ、と訊ねると、彼女はつんとした口調で「あたし、あんたんちに泊まりたいの」と言った。するとあちらは「入れ」と唸るように答えた。それからやはりこう訊いた。「だれのところで眠りたいの、わしのところか、それとも犬や猫どものところか」。マリーアは急いで答えた。「あんたんとこでよ、テュルシエマンどん」。でも相手は彼女を犬どもや猫どもが眠っている部屋に連れ去り、中に閉め込んだ。朝になるとマリーアの顔は見るも無残に引つ掻き傷と咬み傷だらけになっていた。テュルシエマンはまたぶつぶつ言った。「だれとコーヒーが飲みたい、わしとか、それとも犬どもや猫どもとか」。「あいさ、あんたとだよ」と彼女は言った。そしたらこれまたまさしく犬どもや猫どもと飲む羽目になった。立ち去ろうとすると、テュルシエマンはまたしてもぶつぶつ言った。「どっちの門から表へ出たい、黄金の門からか、それとも瀝青ビツチの門からか」。そこで彼女は「黄金の門から出たいわよ。分かりきったこと」と返辞。でもね、こっちはすぐさま閉まってしまい、彼女は瀝青ビツチの門から外へ出なければならなくなった。そうしてテュルシエマンが門の上において、がたがたゆさゆさ揺すぶった



ので、門はぐらぐらぐらついで、マリーアの上にとっさり瀝青ビッチが降って来たものだから、彼女は体全体べっとり瀝青ビッチだらけになった。

マリーアがみっともない恰好かっこうになったのにむしゃくしゃして家に戻ると、コッコッコの雄鶏が出迎えて啼いた。「コケコッコ、瀝青ビッチのマリーアがお帰りだ、コケコッコ」。母親はすっかりうんざりで娘にそっぽを向いてしまい、こうなつては、みっともない実の娘を人目に曝さらすわけには行かなくなった。娘は、瀝青ビッチでくつつけられたように黄金(68)を欲しがつたので、「瀝青ビッチをくつつけられるという」ひどい罰を受けたまんまだつた。

一二 名付け親になった死

昔むかしとつても貧しい男がいた。名前はクラウス。神様からどっさりお宝を授かったが、これがクラウスには大層な苦の種。つまり子宝が十二人でわけ。そしてちょこつとしたらまたちょこつとしたのが誕生。これすなわち十三番目。貧乏なこの男はどうしたら代父パーテが調達パテできようかやきもきしたが、なんとしても当てがない。なにしろ親戚一統は全員既に子どもたちを聖水盤②①から取り上げて「洗礼式に立ち会って」いたことだし、友だち連の中で気の毒がつてこの生まれたばかりのちびの名付け親になってくれそうなのが見つかる望みはありっこないので。そこで思い付いたのが行き当たりばつたりの赤の他人すかに絶すかること。ことに知人のだれかれから、これまで似たような場合、けんもほろろにお断りを喰くらったりしたのだから。

そこで憐れな父親は、最初に出逢った御仁に代父役を引き受けてくれるよう頼むつもりで街道まで出て行った。するとね、すぐに出逢ったのは立派な風采で、姿形の美しい、まことに優しそうな男性。年寄りでもなく若くもなく、柔和で善良な顔つきをしている。それから貧乏人には、その辺の木も花も草や穀物の茎も皆、このひとの前で身を屈めているような気がした。で、クラウスは、こりゃあ神様に違いない、と思ったので、おんぼろの縁無し帽を脱ぎ、両手を組み合わせて、主の禱フアーク・ウザークりを唱えた。この御方はやっぱり神様で、クラウスが口に出さないうちにその望みが分かり、こうのたもうた。「そなたは赤児のために代父を探しているね。よしよし、洗礼式で子どもを取り上げてしんぜよう。わたし、神様がね」。

「なんともはやご親切なこつて、神様」とクラウスはおずおずと言葉を返した。「したが、けっこうでございます。あなた様は、もう持つてる連中にその上おやんなさる。あつちには財産、こつちには餓鬼がきどもをのう。だもんでどつ



ちもうまく行かねえことがたびたびでさ。金持ちゃたら
ふく、貧乏人は腹空⁽⁷²⁾く、つてね」。こう言われて主^{しゅ}はく
るりと向き直り、もう見えなくなつた。クラウスは歩き
続け、暫く行くと、あつちから一人の男がやって来た。

こやつ、悪魔のような恰好^{かっこう}だったが、実のところやつぱ
り悪魔だった。そしてクラウスに、だれを探してる、と
訊いたもの。——赤兎のために代父を探してる、が答え。

——「おや、そんならおいらにしな。おいら、その子を
金持ちにしてやる」。——「おぬしはだれだい」。——

「おいらは悪魔さ」。——「悪魔だつてえ」。クラウスは
そう叫んで、この男を角から馬の脚⁽⁷³⁾までつらつら検分し、
それからいわく「失礼ながら、あなたとあなたの祖母^{ばあ}様
んとこへお帰⁽⁷⁴⁾んなせえ。わしはあなたなんぞ名付け親に
はしねえ。あなたはこの上なく邪^{よこしま}な代物⁽⁷⁵⁾だあよ。うえ
え、忌⁽⁷⁶⁾ましい」。

すると悪魔はくるりと方向転換、クラウスにおぞまし
い響^しめつ面^{つら}を一つやらかすと、空気を硫黄の悪臭で満た
して消え失せた。それからまたしても父親に行き逢つた

のは葎穂ホップの蔓(75)を這わせる支柱みたいにがりりの背高のつぽで、あんまり痩せているものだから骨がかたかた鳴る始末。これも「あんたはだれを探している」と訊き、子どものの代父になつてあげよう、と申し出た。「あなたはどなたで」とクラウスが訊ねる。「わたしは死だよ」と相手はひどく噎しどれた声で名乗った。——死と面と向かつたのにはびっくり仰天したクラウスだが、気を取り直してこう考えた。「これならわしの十三番目の子の洗礼の証人には持つて来いかもな」と。そこでいわく「あなたなら願つてもねえこつて。貧しかりうと金持ちだらうと、あなたは分け隔てをなさらねえ。よしきた、決まりだ。わしんとこの名付け親になつてくれさっしやい。しかるべき時刻に出てらしてくだせえ。洗礼式は今度の日曜にやるだで。」

で、日曜日になると死は本当にやつて来て、正式ドート(76)になつた。これは嬰兒の名付けの父親のこと。さて子どもはごくごく元気に生い育つた。人間が将来飯を食うために何か生計たつきの道を習わなければならない年齢になると、丁度うまい具合に代父がやつて来て、一緒にとある小暗い森おぐに行くよう指図した。そこにはあらゆる薬草が生えていた。死はこう言った。「さて、わたしの名付け子バや、おまえの洗礼の贈り物(78)を受け取るがよい。おまえをどんな医師くすしより優る医師くすしにして進ぜる。これから教える薬草の効用でう。さりながら、わたしが言うことを忘れてはならぬ。おまえが患者のところに呼ばれると、いつもわたしの姿を目にするだらう。

わたしが病人の枕許(79)に立っていたら、治してみせます、と請け合つて、薬を服のませてやつてよろしい。したが、土を囁ささまにや「死ななきや」ならん場合には、わたしはその足許(80)に立っておる。その場合はただこう言うのだよ。かようなご容態ではお助けできる医者はこの世にはおりませぬ、このそれがしとても同様でございます、とな。して、わたしの強力な意志に逆らつて薬を用いるでないぞ。さようにいたせば由よししい事態にならうぞ。」

そう言つて死は立ち去り、若者は旅修行に出た。そしてろくすっぽ経たないうちに評判になつた。それもこの世で

一番偉いお医者だ、との評判が。なにしろ、患者をじいっと見るなり、生きるか死ぬか分かる、という話だったので。この医者は死が病人の足許にいるのを目にすると、溜め息をついて、臨終の人に対する祈禱を唱え、死の姿が枕許に見えると、薬草から抽出した液体を幾滴か服ませ、そして病人は恢復するのだった。というしだいでその名声は日毎いやましに高まった。

さて、この奇蹟のお医者がある国に赴いた。その国王は重い病の床に臥せていた。御典医の面々は、王様が持ち直される望みはござらぬ、と諦めていた。さはさりながら、国王たちだつて一向死にたくはない。そこで老王は、まだ奇蹟に巡り合えるかも、つまり、奇蹟の医師に治してもらえるかも知れない、と思い、呼びにやらせて、ごく大枚の報酬を約束した。さて国王には王女が一人あり、なんとも麗しく上品で、さながら天使のようだった。

王の部屋に入った医者がその臥床の傍らに見たのは二つの姿。枕許には綺麗な泣き濡れたお姫様、足許には冷ややかな死だった。そして王女は、大事な父上をお救いください、と涙ぐましく懇願したが、陰鬱な名付け親はがんとしてそこを動かない。そこで医師は一計を案じた。機敏な侍僕たちに命じて王の寝台を素早く回転させ、急いで薬液を一滴与えたものだから、死は騙くらかされて、国王は助かった。死は腹を立てて退散したが、骨になっている長い人差し指を挙げて名付け子を脅かした。

こちらは魅惑溢れる姫君への恋に燃え、相手の方も深い感謝の念からその心を捧げた。けれどもその後すぐに王女は激烈な重病に罹った。何にもまして息女を愛していた国王は、姫を健やかにできる医者はその婿を迎え、いずれ国王とする旨のお布令を出した。大いなる希望が胸に燃え上がった若者は、病人のところを駆けつけた。――が、死が立っているのはその足許だった。医者は、場所を変えて少し上手の方へ、できれば病人の枕許まで動いてくださいな、と哀願の眼差しを代父に投げ掛けたけれども無駄。死はがんとして動かない。病気の姫君は今にも息を引き取りそう



な様子。それでも彼女は、命を助けて、とばかり一切と若者を見詰める。そこで死の名付け子はもう一度計略を実行、王女の寝台を素早く回転させ、急いで薬液を数滴与えた。すると彼女は蘇生して、感謝を籠めていとしい人に微笑みかけた。けれども死の方は、殺してやりたい、とばかり憎憎しい目で睨み付け、氷のように冷たく仮借かじやくない手で医者をぎゅっと掴み、その場から引き離し、広大な地下の洞窟へ連れて行った。洞窟の中には何千何万もの蠟燭ろうそくが灯ともっていた。大きいのも、その半分くらいなものも、小さいのも、ごくちっぴけなものもさまざま。ぱつと火が消えるのも随分あるし、火が点くのも多い。すると死が名付け子にこう言った。「見ろ、ここに燃えているのは人間めいめいの命の灯火ともしびだ。大きいのは子どもたち、半分くらいなのは壮年の連中、小さいのは爺さん婆さんおぢおばでわけだが、子どもたちでももうすぐ消えてしまう命の灯火の持ち主なことがけっこうある」。

「どうかあたくしのはどれだか教えてください」と医者は死に頼んだ。すると死が示したのはとても小さな燃えさしで、これは今にも消えてしまいう。 「ああ、お願いです、名付け親さん」と若者。「あたくしのを新しくしてください。そうすれば、あの綺麗な許嫁に、王女様に求婚して、お婿さんになって、いずれ王様の位にも就けます。」 — 「そういうわけには行かない」と冷ややかに死は応えた。「まずな、一つが燃え切っちゃったら、その上に新しいのを接いで、火を点けるのだ」。

「それじゃあすぐに、その古いやつを新しいの上に乗っけてくださいな」と医者が言うと、死いわく「そうしてみよう」。で、死は長い蠟燭を取り、接いでみせるようなふりをしたが、わざと手を滑らせてちびた蠟燭を突き倒したので、これはぱっと消えた。その瞬間医者はよろよろっと倒れて、死んでしまった。

死んじやったのに効く薬草なんぞ、どこにも生えてっこないよね。

訳注

まえがき

(1) まえがき ほぼ同文を「L・ベヒシュタイン『ゼリンデ』訳・注・解題」(『人文学会雑誌』第三九巻第三号(比較文化特集号)、二〇〇八・一月)の「解題」として既に発表したが、DBM(二八五七)の一連の訳・注・解題の掲載に当たり、これらを初めて読まれる方のためにあえて付け加えた。

(2) アルンシュタット Arnstadt. テューリンゲンの豪族の一つだったシュヴァルツブルク・ゾンタースハウゼン家のかつての城下町。ほどの産業基盤を持ち、伝統ある文化の中心で、保養地でもある。十九世紀の人口は一八二四年四千余、一八九〇年一万三千弱。二〇〇八年約二万五千。古くはヘルスフェルト家の代官としてケーフェルンブルク伯爵家が治めていたが、一三〇六年シュヴァルツブルク伯爵家の手に渡り、同家は一七〇六年までここに宮廷を開いていた。

(3) マイニンゲン Meiningen. テューリンゲン ツェルト 森に接し、ヴェラ川に沿う都市。十九世紀の人口は一八三三年五千六百強、一八九〇年一万二千ほど。二〇〇八年約二万。公爵家の居城だったエリザベータテンブルク城の他、宮殿、教会、幾つもの高等教育機関があり、産業にも事

- 欠かない。一六八〇年以降第一次世界大戦終結時までザクセン＝マイニンゲン公国の首邑。
- (4) ルイ・ユベール・デュポントロー Louis Hubert Dupontreau. 未詳。
- (5) ヨハンナ・ドロテア・ベヒシュタイン Johanna Dorothea Bechstein. 一七五七—一八四七年。
- (6) アルテンブルク Alenburg. テューリンゲン東部（オスターラント）のザクセン＝アルテンブルク公国の首邑。十九世紀の人口は、一八三二年一万三千弱、一九〇〇年三万七千余。二〇〇八年約三万。
- (7) ヨーハン・ヴィルヘルム・ベヒシュタイン Johann Wilhelm Bechstein. 公国宗教局使丁長 Fürstlicher Konsistorialbeamter だった。
- (8) ヴァンデ地方 Vande. フランス西部。フランス大革命時王党派が蜂起した地方の一つ。ここでの革命政府軍との闘争を主題としたフランス文学には、ヴィクトル・ユゴーの長編小説『九十二年』などがある。
- (9) フォントネイ・ル・コント Fontenay-le-Comte. ヴァンデ川に沿う小都市。ここから舟航可能。
- (10) 里子に出され「わたしは父のいない可哀そうな子だった。母はいともいとけない年齢のわたしを報酬目当ての人間の許へ里子に出した。」
Ich war ein armes Kind, das keinen Vater hatte, und das die Mutter in zarterster Jugend in Mietlingshände gab... (ベヒシュタインの未完の自伝的小品『とどのつまりは』*Sinnua Summarum* に拠る)。
- (11) ヨーハン・マテウス・ベヒシュタイン Johann Mathaus Bechstein. 一七五七—一八二二年。動物学者、植物学者にして著述家。マイニンゲン近郊のドライスイヒアカー林学講習所所長の地位にあつた彼は一八二二年林学＝狩猟学協会を設立。大部の著作がある。
- (12) バート・ザルツンゲン Bad Salungen. マイニンゲン近郊の小都市。十九世紀の人口は一八三三年二千八百余、一八九〇年四千余。二〇〇八年約一万七千弱。ヴェル川とザルツング湖の畔にある極めて古い保養地。
- (13) ザクセン＝マイニンゲン公ベルンハルト・エーリヒ・フロイント Bernhard Erich Freund, Herzog von Sachsen＝Meiningen. 一八〇〇—一八二二年。ザクセン＝マイニンゲン公ベルンハルト二世（在位一八〇三—一八二六）。歴史的には毀譽褒貶相半ばする人物。端麗な容貌で、あらゆる階層の人間と親しみ、それゆえ臣民には愛され、「臣民の友」*Freund seiner Untertanen* と呼ばれた。しかし、彼の政治的決定はしばしば軽率かつ失敗だった。
- (14) 『十四行詩の環』*Sonnettkranze*. 一八二八年復活祭市の折アルンシュタットで出版された。「子ども時代のままやかな養母に」として、当時既に夫に死別していた板密顧問官夫人に捧げられている。
- (15) 一八二三年『テューリンゲンの民話』……と題する創作集を発表した C. ベヒシュタインという筆名で。自力で刊行した最初の著作である。
- (16) 「ヘンネベルク古代研究協会」*der Hennebergische altertumforschende Verein*. ヘンネベルクは十六世紀後半マイニンゲンを支配した君侯家。

- (17) カロリーネ・ウイスケマン Caroline Wisckemann 一八〇八一—一八三四年。フィリップスタール・アン・デア・ヴェラ出身。
- (18) テレーゼ・シユェルツ Therese Schulz 生没年未詳。ウンターマースフェルト出身。
- (19) ゲオルク Georg 一八二六—一九一四年。後のザクセン・コニギンゲン公ゲオルク二世。一八六六年父ベルンハルト二世の退位後、公位を継ぐ。芸術、特に演劇の振興に貢献したので、「演劇公」「Theaterherzog」との添え名がある。
- (20) ホルバイン Holbein 小ハンス・ホルバイン Hans Holbein der Jüngere (一四九七—九八一—一五四三)。父大ハンス・ホルバインや、兄アンブロジウス・ホルバインとともに有名な画家。三者のうちで最も傑出した存在、とされる。骸骨姿の死が、教皇・皇帝・王侯から下下に至るまでの男女と手に手を取って踊りつづ、この世から連れ出して行くさまを描いた一連の図「死の舞踏」は最も有名。
- (21) ルートヴィヒ・リヒター Ludwig Richter アードリアン・ルートヴィヒ・リヒター Adrian Ludwig Richter (一八〇三—一八四)。画家。図案家。まず銅版画家である父カール・アウグスト・リヒターの弟子となったが、次いで、十八世紀後半の市民芸術における著名な画家にして銅版画家ダニエル・ニコラウス・ホドヴィエツキイ Daniel Nikolaus Chodowiecki (一七二六—一八〇一) の腐蝕銅版画技法を手本とした。一八二二—二六年イタリヤ、特にローマに滞在。一八二八—三六年マイゼン図案学校の教員、その後一八七六年までドレスデン美術専門学校教授を務めた。ドレスデンでは間もなく木版画を始め、これが次第に彼の芸術活動の主流となり、民衆に目を向けさせた。ドイツの日常生活のんびりとした叙景、愛すべき諷刺、豊かな空想力により、挿絵画家として一世を風靡する活躍をした。ドイツの木版画を大いに振興するのに役立ったこれら挿絵が飾った書籍として、フリードリヒ・シラーの『鐘の歌』、ヨハン・ベーター・ヘーベルの『アレマン詩集』、ムゼーウスの『ドイツ人の民話』、DMB (一八五七) などなどが挙げられる。
- (22) ルツ・レーリヒ教授 Prof. Dr. Lutz Röhrich 一九二二—二〇〇六年。多年フライブルク大学民俗学科主任の要職にあった。膨大な業績があるが、(こ)では割愛する。極めて聡明、明朗なひととなりで、かつ諷刺を愛した。
- (23) 世紀転換期頃……に貢献した(こ)とは確かである。Bis um die Jahrhundertwende erfreuten sich Bechsteins Märchenbücher einer größeren Beliebtheit und weiteren Verbreitung als die Grimmschen KHM, wobei zum großen Erfolg sicher auch die Illustrationen durch Ludwig Richter beigetragen haben.
出典。ルツ・レーリヒ著『そして彼らは死んではいないから……』Lutz Röhrich: *und weil sie nicht gestorben sind...* Böhlau Verlag, Köln / Weimar / Wien 2002, 三六四—三六五。
- (24) ヴァルター・シエルフ Walter Schertl 一九二〇年マインツに生まれる。児童文学・昔話研究者。

一 勇敢な小男の仕立て屋の話

- (25) 小男の仕立屋 Schneiderlein. Lein はドイツ語の縮小語尾。ここでは、大いに機転が利いて敏捷、かつ、事実勇敢である。ただし、「仕立屋七人で男一匹」などと不当な悪口を被ることもあるくらい、大体が温和な小男というイメージ。寡欲で親切、かつ控えめな人物という設定の KHM 一八二「小さい人人の贈り物」Die Geschenke des Kleinen Volkes もある。
- (26) ロマーディア Romadia. 該当する町はドイツ語圏にはあるまい。昔話では人名・地名など固有名詞は必要ないのだが。
- (27) 布地入れ Holle. この綴りでは「地獄」の意。普通は音の良く似た Hölle である。仕立屋の裁ち台の下の箱で、仕立屋が端切れを溜めるところ。これを役得として客に返還せずくすねてしまうのが——他の稼業のやつかみによる誹謗もあるうが——仕立屋の常習である、とされた。
- (28) 一打ちで七〇 Sieben auf einen Streich. sieben は七という数詞に過ぎない。そこで、単位名詞は憶測にお任せ、とあいなる。仕立屋さんとしては全く底意は無かった、と存ずるが。
- (29) 宿舎・居室 Losament und Zimmer. 一語扱いになっている。Losament はフランス語「ロジュマン」logement（住まい・住宅・居室・貸し部屋）からの借用語。十六・七世紀にドイツで流行語となった。
- (30) 短上着 Röckchen.
- (31) 巨人 Riese. 北欧神話にあつては、灼熱と寒冷から原初の巨人ユミル（両性具有か）が作られ、彼／彼女の養母的存在であるアウズフムラという牝牛が舐めた塩辛い霜の石からプーリという男が出現した。ユミルからはまた「霜の巨人」という種族が生まれた（単性生殖）。プーリの息子ボルが巨人ボルソルンの娘ベストラを妻としてもうけたのが、オーディン、ヴィリ、ヴェーなる三柱の兄弟神である。オーディンらはやがて天と地の創造に関わるが、巨人一族の方が神話では先に生成したわけ。ユミル（この屍骸から神神によって日月星辰、陸地、大海原など世界が作られる）がオーディンらに殺されると、霜の巨人たちは一組を除き、ユミルの血の中で溺れ死んだが、滅亡を免れた巨人夫妻から新たな巨人族が生じ、彼らは神神と人間たちを相手にいずれ雌雄を決すべく、人間の居住地ミッドガルドを取り巻く荒地、山岳、海洋、またヨツンヘイムという巨人の国に住んでいる。すなわち、巨人は本質的には神神に敵対する偉大な存在。しかしながら、ドイツ語圏の民話にあつては、外見はともかく中身は卑小化され、稀に人間を喰うが、本質的には邪悪ではなく、知識を蓄えている存在として扱われている例もあることはあるが、陰險で愚かな悪党程度とあしらわれていることも。一般には、体は巨大だが、さほど頭が良くないといった役回りであろう。
- (32) 一角獣 Einhorn. ギリシア語「モノケロス」monokeros、ラテン語「ウニコルニス」unicornis（一本角）からの借用語。頭に一本の長いねじれた鋭い角があり、山羊の頸鬚、獅子の尾、牡鹿の足を持つ馬に似た伝説上の動物。インドないしアフリカに棲息する、と言われ、処女でなければ捕らえることができない、とされた。従って純潔・清純の象徴。スコットランド王家の紋章でもある。伝承は古代バビロニア王国の浮き彫りに見られるオリックス（アラビア・オリックス Oryx leucoryx。偶蹄目牛科オリックス属）の図に由来するのか（現在はこれが通説）。

中世ヨーロッパでは犀や一角(鯨目一角科の海獣。海豚に似ている。体長五メートル。雄の上顎の門歯の一個は前方に伸び、長さ二五メートルに達する。北氷洋産)の「角」が一角獣の角として蒐集された。こうした俗信は十九世紀初頭まで近世ヨーロッパに存在したようだ。中国の伝承で、聖人が出る前に現れる、とされる瑞獣「麒麟」がこれに相応する。

- (33) 魚 Fischen. Fisch の複数三格。一角獣が王の魚(養魚池か何かの?)に「こういう害を与えるのか未詳。それとも「これが余の魚やら臣民やらに大層害を与えている」と訳した原文 "... das ihm sehr großen Schaden tue an Fischen und Leuten." の Fischen und Leuten (= Fische und Leute) は慣用句か。

- (34) 贖宥 Abad. カトリックでは、犯した罪の懺悔をしたあと聖職者から赦免を受けるが、その際、罪に相当する(と聖職者が判断する)贖いを課される。

- (35) 盾持ち Waffentäger. 従士とも。騎士の従者。騎士の身の回りの世話をする他、騎士の使用する盾や槍などの武器を保管して供をする。騎士見習いの家柄のしかるべき少年がなることもあったが、平民出の頑強な兵士がこれに当たることも普通。

解題

原題 *Vom tapfern Schneiderlein.*

A T U 一六四〇「勇敢な仕立て屋」(一打ち七ツ) The Brave Tailor. (Seven with one stroke.)

これは笑い話である。

なお、三世紀の仏教説話から近東、ヨーロッパに流布、トステイス・トンプソン著『民間説話』(Sith Thompson: *The Folklore*. 荒木博之・石原綏代訳、社会思想社、昭和五二)に記されているが、訳者は当該仏教説話(これは数数の「譬喩経」を指している、と思われる)をまだ発見していない。

五 魔法に掛けられたお姫様

- (36) とんまの弟ともども samt dem dummen Bruder. 「弟」と訳したが Bruder はもとより「兄弟」の意に過ぎない。ドイツの昔話では兄弟姉妹のうち最年少の者が主人公とされることかほとんどなので、(こども)「弟」とした。

- (37) 上げ下げ窓 Schiebefenster. 上げ下ろし窓。引き違い式窓。下を上げれば、上も下がる二枚の窓から成る。

- (38) 蜘蛛の巣色 S spinwebartig. ゃつとんな色やら。薄い灰色か。どなたか「高教を。」

- (39) 亜麻仁 Leinsamen. 亜麻の種。卵円形で扁平。黄色または褐色。塗料などさまざまな用途に使われる亜麻仁油の原料。

- (40) 滌青と硫黄 Pech und Schwefel. 地獄にはこれが付き物で、龍(=悪魔)は地獄の住人である。

解題

原題 *Die verzauberte Prinzessin.*

A T U 五五四 「恩を返す動物たち」 The Grateful Animals.

動物たちの援助により主人公が難題を達成する主題は極めて多い。K H M 一七「白蛇」Weiße Schlange など。ムゼーウスの「三姉妹物語」

（鈴木満訳『リューベツァールの物語 ドイツ人の民話』所収）解題参照。

悪い兄のヘルメリヒはここではあっさり地獄へ落とされたようで、とにかくそれっきり出て来ないが、これが善い弟のハンスに救われ、その恩も忘れて王女を我が物にしようとし、結局これにも失敗して今度は本当に破滅する、という話がくっついていてもよろしい。

六 悪魔がおつ放された「さあ、ことだ」、あるいは、悪魔が火酒を発明した話

(41) 火男 feurige Männer. 単数形は feuriger Mann. ただし, H d A の見出し語としては Feuermann. この「火男」および類似の名称

でドイツ語圏の伝承では周知の存在である。(煉獄で)生前犯した罪業を償っている彷徨える死者とされる。俗信によれば、「煉獄」、すなわち「浄罪界」では火で罪を浄めるとされるから、この世に出て来るそうした亡霊がかつかと燃え盛っていても当然なわけ。「火男」は、内部から焔が噴き出している骸骨、焔の噴き出る鉛の外套を纏った鉛の男、高く幅の広い火の柱の中にある黒い男、小脇に頭を抱えた頭無し黒い男、火のような目をした黒い男などといった人間のような形状、もしくは、不定形（とは申せ、これもさまざま）の火として描写される。このような罰を受けるのはとりわけ、土地の境界標石を動かした罪、とされることが多い。

(42) だんなさん Musik. フランス語「旦那」monsieur の訛り。

(43) あなたの祖母様にかけて bei deiner Großmutter. 「悪魔のお祖母さん」die Großmutter des Teufels なる存在は、K H M 二九「三本の黄金の髪の毛を持った悪魔」Der Teufel mit den drei goldenen Haaren では(悪魔の)「大おっかあ」Ellernutter——つまり「歳を取った方のおっかさん」ältere Mutter = 「祖母さん」——なる単語で、K H M 一五「悪魔と悪魔のお祖母さん」Der Teufel und seine Großmutter ではそのまま「祖母」Großmutter として登場。どちらの話でも人間に優しい。神学的にそんなものがないはずはないが、民間伝承ではまた別。とにかく悪魔にとっては大切な尊属だから、これに掛けての誓言は、なるほど、いかな悪魔でも破るわけにはいきまい。なお、des Teufels Großmutter とか seine Mutter は Teufel 関係の慣用句にかなり登場する。

(44) 天涯孤独：独りぼっち・孤影悄然てなありキキ Maus-Mutter-Stern-allein, mauselallen, mutterseelenallein, mutterseelenallein, sternseelenallein はいずれも allein (独りで) の強調。これから Seele を抜くとうとうした言い方となる。なにしろ Seele (魂) を使いたくても、悪魔にはこれっぽっちも持ち合わせがないのだからいたしかたない。そりゃ分かるんですが、日本語にはうまく移せませんな。なお、D M B (一八五七) 一七「心臓の無

い男」Der Mann ohne Herz ベニヒシユタインは mutterseelensternleinなる表現を用いている。

- (45) 火酒 Brantwein 桃・梅・杏・梨・母などの果実や、穀類・じやがいもなどを原料とする蒸留酒。シユナツプス Schnapps。コルン Korn。ただしコルンは正確には穀類・じやがいもからの蒸留酒を指す。

- (46) ノルトハウゼン Nordhausen ノルトハウゼン・アム・ハルツ。テューリンゲン北部ハルツ山地南縁のツオルゲ河畔にある中都市。二〇〇八年の人口四万五千弱。一八〇二年まではシユールハウゼンとともにテューリンゲンの二つの神聖ローマ帝国直属都市だった。ロマネスクハリゴシック時代に起源を持つノルトハウゼン聖十字、架大聖堂Freymarktでも有名だが、もう一つ、この町の名が知れ渡っているのは、蒸留酒（たとえば「ノルトホイゼナー・ドッペルコルン」Nordhäuser Doppelkorn）製造のため。製造起源は少なくとも十八世紀初頭にまで遡る。

解題

原題 *Der Teufel ist los oder das Marlein, wie der Teufel den Brantwein erfand.*

A T U 該当なし。

テューリンゲン地方の口承とベヒシユタイン編著『テューリンゲン地方の伝説群と伝説園』*Der Sagenschatz und die Sagenreise der Thüringerlandes. 4 Bde. Kesselring'sche Hofbuchhandlung. Meiningen und Hilburgshausen 1835-38.*に拠る。

これは昔話ではなく、じつそり動かされた境界標石と火男に関する珍しい伝説の一つ、および悪魔伝説の一つである。この悪魔伝説はまた、火酒Brantweinの起源を説明するとともに、ノルトハウゼンの火酒醸造業者たちをやっつけているわけ。

- (47) おいらの魂なんぞ悪魔にくれてやらあ、てな罵りや誓い Auchen und schwuren ihre Seele zum Teufel たとえば、ある事が真実であることを強調する際、「(これが嘘だったら) おいらを悪魔が攫うがら」*Der Teufel soll mich holen* などと誓った。偽誓者は悪魔に連れて行かれる、と信じられていたのだ。

- (48) 悪魔がおつ放された「さあ、こただ」*Der Teufel ist los!* 慣用句。「喧嘩、口論、どたばた騒ぎで大変」くらいの意味。あるいは、身の上に一度にたくさん人の災いが降り掛かった人間は絶望して、「今日びは一体悪魔が皆おつ放されたのかよ」*Sind denn heute alle Teufel los!* と首をかしげめ。こうした考え方は新約聖書「彼は龍、すなはち悪魔たりサタンたる古き蛇を捕へて之を千年のあひだ繋ぎおき、底なき所に投げ入れ閉じ込め、その上に封印し、千年の終るまでは諸国の民を惑すこと勿らしむ。その後、暫時のあひだ解き放さるべし」(黙示録二十章二―三節)「千年終りて後サタンは其の檻より解き放たれ」(同七節)に基づく。悪魔は本来地獄に幽閉されているものなのである。ダンテの『神曲』でも「地獄の王ルチフェロ」は地獄のどん底でその巨大な体の胸から下を氷に閉ざされている。

七 ユーターボックの鍛冶屋

(49) ユーターボック Jüterbog。現在の綴りは Jüterbog。現代のフランケンブルク州にある。二〇〇八年の人口一万三千ほど。小さい町だが、ドイツ史にはたびたび登場。

(50) 皇帝フリードリヒ二世 Kaiser Friedrich II。ドイツ王（在位一二二一—一二五〇）・神聖ローマ帝国皇帝（在位一二二〇—一二五〇）フリードリヒ二世。シチリア王（シチリア島と南イタリアを支配）も兼ねる。ホーエンシュタウフェン朝。赤髯（デア・ロートバルト）（ニバルバロッサ Barbarossa）と添え名のあるドイツ王（在位一二一九〇）・神聖ローマ帝国皇帝（在位一一五五—一九〇）フリードリヒ二世の孫。教皇グレゴリウス九世、イノケンティウス四世とたびたび対立。北部イタリアのロンバルディア諸都市の蜂起にも苦しんだ。

(51) ミラノ Mailand。北イタリア有数の都市。北イタリア諸都市の連合体であるロンバルディア都市同盟（一〇九三成立）の一員。当時北イタリアは神聖ローマ帝国領だったが、ロンバルディア都市同盟はしばしば皇帝と争った。

(52) プリア Apulien。イタリア語の綴りでは Puglia。現在イタリア共和国の州の一つ。イタリアの南東部にある地方。いわゆる「イタリアの長靴」の踵の部分。

(53) 都市同盟軍の本管用輜重車 Herr- und Bannerwagen der Stadt。直訳「都市同盟軍の司令官ならびに旗手の車輛」。これには、一個軍の軍用金、および、司令官・幕僚専用の高価な武具・馬具、金銀の食器類、装身具などがさぞやたつぷり積まれていたことだろう。

(54) ベーター Peter。これが鍛冶屋の名前だが、聖ベーター（ペトルス、ペテロ）に因んでいる。聖ペテロの祝日は殉教した日である六月二十九日。鍛冶屋のベーター親方はこの日に生まれたので、そう命名されたもの。従って親方の守護聖人は聖ペテロ（ペトルス聖者）なのである。

(55) ウーリアン殿 Herr Urian。悪魔 Teufel を名指ししたくない時に用いる婉曲な表現。

(56) ペトルス聖者 der heilige Petrus。イエス・キリストの十二使徒筆頭。口承文芸では主イエスとともに、あるいは単独で地上を遍歴することがある。

(57) 淨福 die Seligkeit。天国の）至福。極楽往生。

(58) キフホイザー Kiffhäuser。ベヒシュタインはこのように綴っているが、普通は Kyffhäuser である。テューリンゲン州とザクセン＝アンハルト州の州境に沿う黄金の沃野と下ハルツ山地の南東にある山の尾根。DS 二三「キフホイザーのフリードリヒ赤髯帝」Friedrich Rotbart auf dem Kyffhäuser によれば、皇帝は死んだのではなく、最後の審判の日までこの山中の洞窟で、石の円卓に向かって座っている、とのこと。眠っているのだが、ときたま目覚めることも。ある羊飼いが、皇帝お付きの小人に案内されてフリードリヒの許に行った話では、赤髯帝は、鴉どもがまだ山の周囲を飛んでいるか、と羊飼いに訊き、羊飼いが頷くと、それではあと百年眠らねばならぬ、と言ったそう。

この伝説は十九世紀には強力な君主の下でドイツ諸邦の統一を目指す政治運動ととりわけ結び付けられた。伝説を素材とした作品のうちでも有名なものの一つはフリードリヒ・リュッカート（一七八八—一八六六）の詩「老バルバロッサ」*Der alte Barbarossa*（一八一七）である。なお、一八七二年プロイセン王国の主導によりドイツ統一が成し遂げられ、ドイツ帝国が誕生すると、一八九〇年から九六年の間に、キュフホイザーブルク山山頂のかつてのキュフハウゼン城の廢墟に「バルバロッサ記念碑」とも呼ばれる「キュフホイザー記念碑」*Kyffhäuserdenkmal* が建立された。

(59) 皇帝フリードリヒ Kaiser Friedrich 赤髯（赤髯ローザムン）（＝バルバロッサ *Barbarossa*）と添え名された神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世。

前掲訳注「皇帝フリードリヒ二世」参照。物語冒頭、鍛冶屋のペーターはフリードリヒ二世に武器師として仕えた、となつてゐるのだから、赤髯が主君なわけではない。もっとも、民話なんてこんなものだから、ベヒシュタインは百も承知で記してゐるのであろう。

(60) ラーツフェルト *Rathsfeld*. パート・フランケンハウゼンと「キュフホイザー記念碑」の間広がるキュフホイザー森（ツツト）にある開墾地。D S二四「ヴァルザーフェルトの梨の木」*Der Birnbaum auf dem Waiserfeld*の内容は、ベヒシュタインが述べてゐる梨の木（ツツト）と同工異曲。ただし、ヴァルザーフェルトはザルツブルク近郊の地名である。

解題

原題 *Der Schmied von Jüterbogk*.

A T U三三〇「鍛冶屋と悪魔」*The Smith and the Devil*。

一〇 老魔法使いと子どもたち

(61) 魔物に *dem Bösen*. 「邪悪なるもの」に、「つまり」、「悪魔」に。

(62) 妹に *zur Schwester*. 実年齢については原文からは分からない。少年と少女のはらからが主人公となるドイツの昔話を訳す場合、我が国では伝統的に少年を年長、つまり「兄」とし、少女を年少、つまり「妹」としてゐる——たとえば、K H M一一「小さい兄と小さい妹」*Brüderchen und Schwesterchen* や K H M一五「ハンゼルとグレーテル」*Hänsel und Gretel* において——ので、これに従つた。

(63) 打穀場 *Tenne*. 土に石灰、水などを加えてよく捏ねたものを塗つて叩き固めて仕上げた土間で、百姓屋敷の納屋の中にあつた。かつては、収穫した穀物の穂をここに広げて穀竿などで打ち、穀粒を穂から取り離した。

解題

原題 *Der alte Zauberer und seine Kinder*.

A T U 三三 A 『呪術的逃走』 *The Magic Flight*.

一 一 黄金のマリーアと瀝青のマリーア

(64) 円形飾り菓子 *Torte* 大きな円形のケーキで、小麦粉、バター、卵、砂糖などを混ぜて天火で焼き上げたケーキ台の上に、生や砂糖煮の果物（桜桃、苺など）、メレンゲ、チョコレート、生クリームなどをたっぷり飾り付けたもの。メレンゲで飾るなら一緒に天火で焼く。

(65) 瀝青 *Pech* チャン。中近東など今日の油田地帯に古代から天然に産出したほか、原油や石炭、木材を乾溜する際にできる黒くどろりとした液体残留物であるタール、あるいはタールを蒸留すると残る残渣。ヨーロッパでも近世に至るまで木炭を焼いていたので、その副産物としてありふれた物質だった。船板や船舶用の網に塗る防腐剤として使われた。現代人には普通原油精製の副産物としか考えられまいが、石油・石炭の使用が一般的になる前から存在したのである。K H M 二一「灰かぶり」*Aschenputtel*、K H M 二四「ホレのおばさん」*Frau Holle* にも出て来る。

(66) テュルシエマン *Thurschemann*。未詳。

(67) 乳脂 *Rahm*。ドイツ語圏南部ではクリーム（「ザーネ」*Salne*）をこう言っ。

(68) 瀝青でくっつけられたように黄金を欲しがった *auf Gold erpicht*。普通は *auf Geld erpicht*（金の亡者である、拜金主義の）。

解題

原題 *Die Goldmaria und Pechmaria*。

A T U 四八〇「親切な少女と意地悪な少女」*The Kind and Unkind Girls*（A T 四八〇「泉の傍の糸紡ぎ女。親切な少女と意地悪な少女」*The Spinning Women by the Spring. The Kind and Unkind Girls*）。K H M 二四「ホレのおばさん」*Frau Holle*。

二 二 名付け親になった死

(69) 代父 *Patte*。キリスト教の幼児洗礼に立ち会って、洗礼を受ける者の神に対する約束の証人となる大切な存在。男であれば代父（名付けの父）、女であれば代母 *Patte*（名付けの母）。名付け親は当の嬰兒にとっては将来ともに両親同様、あるいはそれ以上に頼りになる。それだけに貧乏人の子どもの名付け親になるのはありがたい話ではない。立ち会う時に必ず提供しなければならない洗礼の贈り物（装飾品とか金銀の貨幣とか）からして出費だし、子どもの親から相応の見返りを期待できないとなれば。

(70) 聖水盤 *Taufe*。カトリックや英国国教会の教会の出入り口付近にある聖水（司祭・牧師によって清められた水）を満たした容器。

(71) 主の禱り *Vater Unser*。ドイツ語では「天にいます我らの父よ」*Vater unser in dem Himmel*で始まる。イエスが弟子たちに教えた模

範の祈禱。新約聖書マタイ伝六章九一〇節、およびルカ伝十一章二一四節にある。

(72) 金持ちやたらふく、貧乏人は腹空く der Reich schwelgt, der Arme hungert. 「裕福な者は贅沢三昧、貧しい者は飢える」。

(73) 角から馬の脚まで vom Horn bis zum Pferdfuß. 悪魔は、牡山羊の角を頭に生やし、蝙蝠の翼を背中に付け、(少なくとも片方は)馬の脚をしている(ただし蹄は二つに割れて)、馬の蹄とは異なる)、と相場が決まっている。従ってクラウスは、悪魔の頭のとっぺんから足の爪先までじろじろ眺めた、とこういことになる。

(74) あなたの祖母様んとく zu deiner Großmutter. 「悪魔の祖母」なる不可解な存在はしばしばドイツ語圏の昔話に登場する。DMB

(一八五七) 六「悪魔がおつ放された」Der Teufel ist los 訳注「あなたの祖母様に掛けて」参照。

(75) 葎穂 Hopfen. 麻科の多年生蔓草。蔓の高さは七一二メートルにも達する。夏黄緑色の花を開き、楕円形または広卵形・松毬状の果実を結ぶ。芳香と苦味があり、健胃剤とし、またビールに香味を付けるのに用いる。

(76) 正式ドイツ ordenlicher Dot. Dot と言う単語は『リムドドイツ語辞典』Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimmにも載っていない。

(77) 名付け子 Pat. 本来は代父 Pate と同じだが、この場合は名付け子、教子。

(78) 洗礼の贈り物 Patengeschänk. 前掲訳注「代父」参照。

(79) 病人の枕許に立っていたら Stehe ich zu Häupten des Kranken. この物語では、枕許の死は治癒する病気を、足許の死は死病を意味する。

KHM四四「死神の名付け親」Gevatter Todでも同じ。しかし、六代目三遊亭圓生演ずる「死神」では逆になっている。三代目三遊亭圓遊(鼻の圓遊)の「全快(誉れの替間)」(暁岐康隆・興津要編集・解説「口演速記明治大正落語集成」第六巻、講談社、昭和五五)は大層陽気な晰で、医者が死神を騙しきって出世する、ドイツにもある類話と同類項の筋立てで興味を惹かれる。売れない替間(太鼓持ち)が死神と知り合いになって活躍するが、(こ)でも、病人の布団の裾の方に死神が座っていれば、「エヘン」と咳払いをするだけで全快する、としている。

解題

原題 *Gevatter Tod*.

A T U 三三三「死神の名付け親」Godfather Death.

なお、訳注「病人の枕許に立っていたら」で言及した「死神」なる落語は、明治中頃イタリア・オペラ「靴直しクレスピーノ」を素材として作られた、との説(「対談 死神」——『圓生全集』第四巻、青蛙房、昭和四二——で飯島友治東大教授、今村信雄の考証にも)がもつぱら行われており、事実と看做されていたようだが、これには誤認があるので、もっと正確に伝えておく必要がある。関係者は少なからず伝聞で発言していたきらいがある。

「靴直しクレスピーノ」という題名のオペラはない。該当するのは「クリスピーノと代母（＝名付けの母）、またの名、医者と死」Crispino e la comare ossia il medico e la morte（ナポリ生まれの作曲家レイジー（一八〇五―一八五九）とフェデリコ（一八〇九―一七七七）のリッツ兄弟 Luigi e Federico Ricci 共作の四幕喜歌劇。一八五〇年作曲。同年二月二十八日ヴェネツィアのサン・ベネデット劇場で初演）である。貧しい靴屋（靴直し）でもよいが）クリスピーノは絶望して井戸に身を投げて自殺しようとする。そこへ一人の女が現れ、医者になるよう勧める。自分が病人の傍に立っていないかったら、病人は助かるから、と言いつ残して。言うまでもなく、この女はクリスピーノの代母であり、かつ死（イタリア語の「死」、すなわち、「ラ・モルテ」la morte は女性名詞なので、名付け親も女の名付け親＝代母である「コマーレ」comare となるわけ。なお代父は「コンパレー」compare）なのである。名医と評判を取り、かつ大儲けをしたクリスピーノはやがてひどく傲慢になるが、結局は死に臨んで改心し、お蔭で甦りもする。

明治期にヨーロッパでこれを見た日本人が、帰国後その粗筋を圓朝に語り、芸熱心な圓朝が翻案して斬を作った、ということは十分考えられるから、それはよい。それはよいが……。現行の落語「死神」の粗筋はこの喜歌劇とは相違しており、KHM四四とは一致しているのである。ちなみにドイツ語の「死」、すなわち「デア・トート」der Tod は男性名詞なので、KHM四四では名付け親は男、つまり代父である「ゲヴァッター」Gevatter となっている。六代目圓生の演出でも「死神」は男性。なお、前記三代目三遊亭圓遊の「全快」でも同じくはつきり男性。

前記「対談」で圓生自身は「明治二十年代に、名人の圓朝が作ったという話がありますが、高座で演りだしたのは、初代の圓左（圓朝の弟子初め二代目鯉朝。後改めて圓左）さんです」（ふりがなは訳者）と応じている。勉強家の六代目圓生が、圓朝作であることはあえて否定していないけれども、彼が演じたことは否定している。

ところが、矢野誠一は、「死神」は初代三遊亭圓朝の作品とされており、定本の春陽堂版『圓朝全集』にもちゃんと収録されている、と明言——江國滋・大西信行・永井啓夫・矢野誠一・三田純一責任編集『古典落語大系』第二巻、三一書房、一九七三——している。しかし、管見によれば、圓朝の口演落語が入っているその十三巻（鈴木行三校訂編纂『圓朝全集』、春陽堂、昭和三三）では「死神」は発見しえなかったし、同巻の「索引（外題）」にも見当たらなかった。なるほど、「死神」は圓朝作かも知れないが、彼が高座に掛けていなければ、その口演落語に収録されていないのは当然である。

童話作家北村正裕氏はこの問題について詳細な論文「死神のメルヘン」（駿台フォーラム）一八号、二〇〇〇・八月）を発表、「死神」はKHM四四を基にしている、という趣旨を述べている。また、KHM四四を圓朝に伝えたのは福地櫻痴（一八四一―一九〇六）が有力な候補だ、と考えている。

(80) したが、土を噛まにゃ「死ななきや」ならん場合には 原文は wenn er aber Erde kauen muß である。「土を噛む」Erde kauen という慣用句は、ルツ・レーリヒ編著『諺的慣用句事典』Lutz Röhrich: *Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten*. 4 Bde. Hender Freiburg / Basel /

